
流れる 羊雲

木場 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れる 羊雲

【Nコード】

N6744W

【作者名】

木場 新

【あらすじ】

一話完結。ふわふわ雲のかけらのようなお話の群生。誰かが何かをふと思いついたという日常のワンシーン、気持ちから回想、ときにパラノーマル、をちぐはぐに綴っていきます。

P i e c e 1 「春 はじまり、こぼれおつるなにやら」

めずらしく、昼を前にして起きていた。毎週末したたか飲んで、ぐてぐてごろごろの休日ばかりなのに。

今年も早めに桜が咲いた。でも、「あ、花見だ」なんて気付いた頃とつくに花は散っていたり。

しかし、よりによって今日は天気が素晴らしい。春らしい青空。したがって、たまった洗濯モンをこうしてベランダに干してる。

新しい靴下買わねえとなあ、なんて擦り切れてきたそのつま先を伸ばしたり縮めたり、実にのん気に春風に吹かれてる時間。

そして、昨夜のことを思い出しながら、みんな新しくスタート切ってるんだとか、自分の中に少しハッパかけてみる。

ホー ホケキョ

なんだろ、この間は。あいつらこの辺までやってくるんだなあ。

なんだか本格的に春が動き出してきたみたい。

昨夜、いつもの店に締めで寄ってみた。たいていラストの時間帯なわけだけど、いつもどおりミサキを指名して小一時間ばかり過ごす。客で数回来ているだけで、彼女とはいやらしいことも無く、ドラマチックなことも無く、ほんとにただのお客1号だった。

ところが、その極めて浅い付き合い加減のおかげで、ミサキとは昨夜で最後になった。彼女、店を辞めて学校に通うとか言ってた。しっかりしてるから、そしてミサキのまっすぐな目には未来がはっきり見据えられてるなあと感じたせいか、そのときなんだか嬉しくなった。単純だね。バカだね、男って。

と、まあ感動しやすくなったのも歳のせいなのか。なんにせよ、誰かしらがそうやって行動を起こして、何かを始めようとしていて、それが溢れているこの時期の気配が、緩やかに胸を打ってくるのは確かなわけ。

深呼吸してみた。首をコキコキ鳴らして。

ホー ホケキヨ！

なんだよ、「おまえもそうしろよ」って言うわけ？ ホケキヨさんも春が来てうれしいんでしょうが、そうだね、きみらも環境に合わせて、きつと変わってきたんだよね。よしと、ここはひとつ、自分も変わらなくちゃ。

さっそくみんなにメールを送信しまくる。

「とりあえず、みんなで飲もうぜ」

やってること、変わらないか。いやいやこれから。春はこれから、その先は夏。

ベランダでYシャツたちが揺れている。

ミサキのアドレスを消去した。何を期待してたのか、当時メロウなやりとりだと思ってたメールの残骸も、この際恥ずかしくなって消去した。それからそれから、同じフロアの社内一脚が長くてキレイなコにメールしといた。なんでも、もうじき結婚するとか。そうになると、毎日のように密かに拝ませていただいてたあの御み脚とお別れかな。

おいおい、まだとどめはささないでくれよ。でも、まあ、こんなふうにして世の中は移ろっていくのでしょうね、なんて悟り開いたふうに構えながら午後の街に出かけようと、冷め残ったコーヒーをすすった。

ホー ホケキヨ！

ホケキヨさんの姿は見えぬものの、きつと新しい季節の訪れを知らせてくれる、それは次への扉を開くためのチャイムなのかも。だから、もう一度期待しながら耳をすませて……

ホー ホケキヨ！

ほら！

＜おしま＞

P i e c e 2 「酔い歩いて港街、やがて暁光」

「ダメだ。いっぱい」

渋い面をひっさげて、ユースケが階段を上がってきた。

夜中もだいぶふけこんだっていうのに。不慣れな土地のせいかな辿り着くのに時間がかかりすぎた。まあ、案内人のユースケがその店をうろ覚えだったのも悪いが。男二人、洒落た港街を夜中に、うろうろ。少し重たくなってきた引き出物を手に、うろうろ。

昔馴染みの友人が、今日、挙式をゴージャスなホテルであげた。そして2次会、3次会を経て、おれとユースケはその勢いで飲み明かそうかとなったわけだが、頼みの店がたった今をもってしても満杯とかいう状態で、仕方なくまた彷徨い歩くのだった。

「残念だな。あそこの人に会わせたかったのに」

ユースケはめずらしく悔しそうに、おれの半歩前を歩きながらそう言い放った。

「いや、おれは占いは信じないよ」

その店にいるらしい、オーラをみるとかいいうオバサンのことだが、どうにもおれには胡散臭い。ユースケは元来そういったものには否定的だったはずだが、なにか核心をつかれたのだろうか。けっこうみる目があるんだ、なんていつもの冷めた口調で話していた。

「落ち着いたら、詳しく話すよ」

ユースケは薄く笑うと、足をその先のゴチャゴチャしてそうなバーに向けた。こんなところくらいしか開いてはいない時間かもしれない。ただ、とても落ち着くとは思えないが。

と、中はなんとダーツバーだった。しかも電子式でピコピコいつてる。狭い窓際の席に場違いな二人が腰をおろし、その横をビュンビュン矢がすり抜けていく。危ない。

そうして苦笑いしながら、矢が弾け飛んでくる戦場さながらの状況にも耐えながら、おれとユースケは酒を飲み続けて、ぼんやり

した話を繋いでいた。

「さっきの店の人の話なんだけど、おれが先輩に初めてあそこに連れて行ってもらったとき、その人に特別にみてもらって、『これからさき振り回されることには気をつけるのよ』とか言われて、はじめなんのことだかわからなかったんだけどさ……」

しばらく、ユースケのそのオーラおばさんの話を聞きながら、彼らしくもなくこのところ弱気で頼りきりだったと思わせるようなエピソードが並べられる中、当のおれの方はというとそれを噛み切りにくい肴にして、渋々杯を重ねていた。

思えば、たかだか数年前までの彼の印象しかおれは知らないわけで、本当はあの頃彼に抱いていたようなクールな印象ばかりのものでもないわけで、だから、こういった機会というヤツが腹を割って話す瞬間を演出するわけでもあり、したがってやっぱりに単純に時間の経過と酒の魔力、これらが各々のバケの皮を剥いでいくんだ。なんて、あらぬことを一方では思っている、もはや明け方目前の街の片隅。

でも、おれは誰彼問わずこうして過ごしてる魔性の時間が好きなんだと思った。

ピコピコダーツの矢が、すってんころりん、おれの引き出物のなかに弾かれて飛び込んできた。

すんません、とか言いながら、兄ちゃんがそれをとりに来る。ユースケがそれを拾って、怒るでもなく渡してやる。

「もう出ようか」

「あん。けっこ、眠い」

そうやって、よれよれになったおれとユースケは白々となり始めた街に再び降り立ち、最寄の駅をふらふらと目指した。

「重てえ、この引き出物」

ユースケが、おれのその言葉に微かに苦笑い。

「でも、おれも結婚しようかなとか思ったよ、あいつの最後のスピーチ聞いてさ」

ユースケのその言葉に、おれは思わずコケそうになった。なんだ、そういうことか。オーラの力とは。きつと、ユースケとそのカノジヨとのことも、なんだかんだいって安泰とかいうことでまとまったんだろう（酔っていて、話半ば憶えていない）。

斜に構えてた彼が、なんだかひどくまっすぐになってるような感じに変わったのなら、そういう効果なら悪くないか、オーラパワー。「あ、おれもそう思ったわ」

これはもちろん負け惜しみなんだが。カノジヨ、いねーし。

それから駅まで辿り着き、始発を待つおれを尻目にユースケは一人「やっぱダルい」とタクシー拾って消えていった。相変らず、去り際が鮮やかだった。

そのシルエット、いつも変わらず細くて華奢な、それでもって幸薄げに猫背な後姿。そんな今まで見慣れたユースケの背中に、いまや輝かしいオーラがこの時のおれにでもハッキリ見えた、気がした。いや、ひよっとしたら寝ぼけてたのかも知れないが。

<おしまい>

P i e c e 3 「タイムスリップ、時は妙に転がりだした」

ひよんなことから、僕は1999年に舞い戻った。

大地震が起るとか、核戦争が勃発するとか、疫病が蔓延するとか、そんな阿鼻叫喚、でも想像できないような世紀末のイメージが、まことしやかに流布されていた頃。21世紀の幕開けを目前にして気運が高まると、そんな風潮もどこかに鳴りを潜めて、結局いつもと変わらないクリスマスがやってきていた変な年の瀬。僕は、シンブルデザインの低価格設定商品が流行る中、街中のデパートの貴金屬やら、高級ブランドバッグのフラッグショップやらをハシゴして歩き、カノジョへ献上する品を探していた。

早くしないと、この世が終わる。イベントごとでも気の乗らない僕は、そんな強迫観念に駆られたフリでもして、貯水槽内の水位みたいなテンションを、殊更強引に、芝居がかったほどに上げてアゲて、ひたすら求めて歩く。なんだか月の砂漠のキャラバンみたい。

このとき、日本では新たな種が覇権を握っていた。群れて歩く、ヤマンバ族。どこから流れてきた部族だったか。今となっては絶滅品種。このときを謳歌していた彼女たちはどこに消えたのか。走りながら、ふとそんなことを考えていた。

「2000年になるとコンピュータが誤作動する可能性があります。身の回りのコンピュータ内蔵のものは管理に気をつけてください。女子高生のみなさんも、LGOなどはコンピュータ制御されていますので、身に付けている方は、十分に注意してください」

ちょうど、カノジョへのうってつけのクリスマスプレゼントをゲットした僕は、意気揚々と瀟洒な店舗を出て、通りでそんなアナウンスの声にぶつかった。

「超コワくない？　ちよースゴくない？　てゆーか、なに言ってるか全然わかんないんだけど」

「エルゴ、なんかやばいの？　うそー。えー、また買い換えんのー

？ そんなカネ、ねーし！」

傍のヤマンバ女子高生二人の、そんなやりとりが耳に入る。

LGOってなんだっけ？

あ、エルゴの略称で呼ばれる、当時の女子高生の必須アイテムか。ま、カノジョへのプレゼントがそれくらいのもので済めば、安上がりなんだけど。電車やATMがおかしくなるより、ヤマンバ達にとっては自分のLGOがおかしくなる方が一大事か。

そんなことより、僕はクリスマスにカノジョに逢えなくなって自滅した、そんな二の舞はするもんか、と慎重にプレゼントを抱え、心を落ち着けて臨んだ。

誰かが予言してくれていれば、クリスマスにあんな仕事なんて引き受けなかった。たかだかあの日の選択の狂いで、その後の人生は真っ暗。だから、わざわざこうして時を巻き戻して、僕は世紀の狭間を飛び越えて、過去に舞い戻ったんだ。

そして、時空を超えた甲斐があり、理想どおり、そこからの時間をカノジョと過ごしていった。甘いクリスマス・シーズンから、新たなミレニアムを迎える瞬間まで。万事、拔かりなし。明るい未来を思い描いて、再び世紀末越えに挑む。

街では、カウントダウンが始まった。

一斉に声を揃えて、世界中が、同じ事をしている。もちろん、ヤマンバ達もLGOを手し、渋谷のスクランブルに集結。

なんだ、1999年っていつても、なんとなく節目って雰囲気、それ以外のなにも起こらなかったじゃないか。確か。2000年を迎えるってなると、新たな千年紀に突入、その期待値の高まり、喜びが大きかったじゃないか。

安穩と構えていよう。僕はカノジョと共にトンガリ帽子を被って、クラッカーを携えて路上の人波に吞まれていた。

しかし。

スリーカウントに入った瞬間、地球上全ての文明の利器が動きを止め、人の声を残して沈黙した。

それに人々が気づいて、騒ぎがひとしきり拡大したところで、夜空から、神秘の大王が降りてきた。

超巨大なLGOに乗って。七色の光彩。光の触手が、スクランブル交差点の中央に集ったヤマンバ達を迎えて、大歓声の彼女らを誘い、そのマントを翻した。

交差点に突き立った光の柱、時空エレベーターは、次々とアルキオネをめがけてヤマンバを運んでいく。

巨大LGOから神々しい音楽が奏でられ、オーロラのような光彩がたなびく。

大王は、にこやかにヤマンバ達を見送りながら、ただうなづいている。

そうして、あっけにとられながら2000年を迎えた夜、ヤマンバ族は楽しそうに、賑やかに旅立って行った。

偶然、カノジョとその場に居合わせた僕は、その光景を“2000年のラブパレード”と呼んでいる。

騒然とする群衆の中を掻き分けて、ヤマンバの姿を追いかけているうちに、僕はカノジョとはぐれてしまい、2000年をそのまま呆けて迎えてしまった。そんなわけで、僕自身その瞬間はデスパレートだったけど。

ミレニアムに沸いた星。以降、僕の人生のプログラムはメチャクチャに書き換えられ、事件は“Y2K”なんて、おしゃれにかっこつけた呼び名で括られて、混乱は終息した。

さて、こんなこと、誰かが予言していたっけ。

<おしまい>

P i e c e 4 「ミッドナイト・ダンサー、天使の翼が羽ばたいた」

僕がサチと出会ったのは、まだコンクリートの路面がひんやりしている頃だった。

また、くだらないミスをして、上司に怒鳴られた。結構、応えた。仕事が出来ないか、日々いやだと言っていると溜息ばかり。僕は憔悴しきって、覇気を失い、暗闇の底を行脚するように、夜な夜なビル谷間を徘徊していた。

ある大きな箱舟のような施設に辿り着いた。コンベンションホールを擁する巨大空間も、夜中になると、そのパブリックススペースの一部では秘め事のような二人やら、うろつく怪しい影が僕以外にもいくつかたむろしている。そんな中、テンパライトに映る影と対峙しながら、蒸気を上げている集団。一隅から裏拍子のリズムに合わせて、天使の髪が揺れていた。制服姿の短いスカートが高速でなびく。

楽しそうに、ひたむき。そんな女子高生数人の姿に、見とれてしやがんでいた。

いや、パンチラに期待したわけではなく、当然彼女らはスパッツ履いているし、なんだか若いっていいなど、単純に羨ましく眺めていた。R & Bにノッた天使が舞うたびに、僕の体も自然と揺れ始める。彼女らのダンスに呼応して、心地よくノッてきているのがわかる。

スピーカーからの曲が一段落。動きがするすると、止まる。

「すごいすごい。かっこいいじゃん」

僕は、悪気無く心からの感動を伝えるべく拍手を贈る。

「なにみてんの。アンタ、酔っ払い？」

そりゃあそうか。ニンマリしそうにうっとり見てたら、普通はそう映るよな。

威勢のいい、長身の痩身。金髪に近い長髪をツインテールに結っ

ている。息の乱れが無い、ハスキーばくも通る声が僕に突き刺さる。
「違う違う。ほら、見ての通りカメラマンだよ。写真撮ってもいいかな？」

「フザけんなよっ！ とつとつ、帰んな」

言葉は乱暴だが、凜としている、リーダーの品格。大天使。地べたにへたっていた他の天使たちも、彼女の言葉に臨戦態勢。邪魔すんなよ、帰れと一触即発。

「違う違う。マジでカンドーしたんだって。すごく、躍動感があったよ。ずっと見てるうちに、おれの腐った魂が、なんか、こう、解放されて。それからフレッシュな何かが、そう、エナジーがどつと、あ、生きているって気力、覇気だ、そう、覇気が伝播してきた！ 写真撮ったら、それがよく伝わるんじゃないかと」

「なに言ってるか、よくわかんないよ。別に今は見世物じゃないし、アタシたち、ダンス好きでやってるだけだし。冷やかしなら、だまってるくんないかな」

「邪魔するつもりは無かったんだ。ごめん。退屈な毎日を生きるストレスから開放されてさ、少しネジが緩んでしまったかな」

僕はそう言って、その場にへたり込んだ。それでも、強がって、なんでだろう、彼女に水平に拳を向けて親指を立てた。作り笑顔。

「悪用しないから、今度、写真撮らしてよ」

「ダメ」

踵を返して、曲を再び鳴らすと、みんな立ち上がり、彼女を軸にして、テンションを上げていく。天使たちは、寸分の狂いもなく、見事にシンクロしている。キレイじゃないか。そうして、僕はしばらく、植込みのようになって、動かずに黙って見ている。ロンリーギャラリー。

「ねー、アンタも踊ってみる？ まだ、若いんでしょっ」

「ありがとう、リーダー。おれ、まだ、イケてるかな」

「イケてないけど、なんとかなるよ。『リーダー』はやめて。あたしはサチ」

「スギハラと申します」

僕は、懷から名刺を出してかしまると、サチもみんなも笑った。受け入れられたのかな。名刺の束を、夜空に撒いた。ひらひらと舞う、天使の羽に変わった。

「サチ、おれにダンスを教えてよ」

「タダじゃないかね」

天使のイタズラな笑顔。

僕は、不慣れながら、なんとなくビートを刻んでみる。

昔、何を血迷ったのか、夜の路上でギター掻き鳴らしてみた、青い気持ちが生ずる。

本気で、取り組む気も無く、中途半端に始めたそれは、瞬く間にマイブームとして黒歴史に綴られ、その頃の仲間も今や普通に社会人として生活している。

甦る思いと、現実走っている時間を対比させながら、そんな交錯する葛藤みたいな気分のモヤモヤをストレスと呼ぶのであれば、いいだろう、このビートに預けて粉碎させてやれ。

非日常を欲していたんだと、このとき気づかされた。

真夜中の魔法なのかな。ふと、そんな気がしてきた。不思議とそう考えたら気が晴れたようで、少し、日常にも前向きになれそう。真夜中の天使が僕の支えだ。違う自分がいるってことに、気分を奮い立たせて、僕も天使に舞い戻る。翼を隠した彼女の背中を見ながら、僕は必死に真似して踊ってる。

<おしまい>

P i e c e 5 「潮騒、季節の巡り、大海へ漕ぎだす手前」

海が見たいと、ふと思った。

オフィスの窓から、からりと晴れ渡る午前の空。

空気が乾いているんだろな、髪の毛が今日はいくことをきいてくれて、意のままにスタイリング自在。

今朝、少しひんやり感じた5月の薫風は、鮮やかになり始めた街路樹の新緑を揺らして心地よい。きらきらしている、新鮮さ。

通りを闊歩して出勤を急ぐ誰しもが、一瞬だけでも感じているんだろうか。僕は、そのとき通り抜けていった風のなかに、潮の香りが乗せられていなかったかを思い出してみる。

シヨウコが結婚する。僕の幼馴染でもあり、小さな港町である田舎から互いに大会社の東京に出てきて、長い間戦場を共にしたような同志。おおげさながら。

彼女は編集者としておしゃれな雑誌を世に送り出して、僕はそれを羨ましく眺めているだけの、ほんの一介の商社マン、いやボーイといった感じ。出来の違いは、大きかった。シヨウコは都会派として見事に夢を叶え、僕は挫折しつつも妥協の上、なんとか都会の隅で生活している。もう、仕事にも生活にも、いっそ人生においても華々しさなんて求めない覚悟はできた。それが僕のシティライフなんだ。

たまには、つながりのあるシヨウコと、洒落たバーのカウンターで並んで酒を酌み交わす。かつて、潮臭い港の堤防で釣竿を並んで垂れていた仲とは思えない二人。仕事が大変なこと、いろんな世界があることを語り合って、ときには思い出話に及んで懐かしがったり。互いに鼓舞するときも、傷を嘗めあうときもあった。でも、シヨウコは持ち前の勝気さで、オトコモード全開で困難に立ち向かっていく。それもあって、あの位置に立てたんだと、僕はある種男女の枠を超えて尊敬している。

しかし、あるとき、彼女の前に立ち上がった壁は、彼女一人ではどかしきれなかった。携わっていた雑誌の閉刊。人員も削減され、ほどなく彼女は退職した。

しかし、シヨウコは地元の港町に程近い地方中核都市で、タウン誌をつくるという新たな仕事に、あつという間に転身していた。実に鮮やか。

冬枯れた寒々とした港町へ。まだ東京でも鈍色の空から雪がちらほらしそうな気配を引きずっている季節。シヨウコと僕は、よく会うときのように、東京タワーが見える窓を前に並んで、何に對してかよくわからない乾杯をした。

あのとき、目の前の夜景を焼き付けるように、しばらく感慨深げに眺めている瞳の奥には、すでに新たな決意と野望があつたなんて。次に彼女が口を開くまで、僕はどのように慰めの言葉をかけたらいいか、ずっと悩んでいたのに。

「また、あの海をずっと見ていたくなつたんだ」

前向きに進む彼女の言葉らしいな、と思いながら、その口から滑らかに出てくる新プランに目を丸くしつつ、同時に安堵して、なおかつ喜んでいた。

「おまえは、ほんとに、、、」

僕は苦笑いしながらも、祝杯だと、まるで彼女の親のように、その晩、当の彼女よりも浴びるほど酒を飲んだものだった。

「そして、結婚か……」

手元の招待状をくるくるしながら、それが届くよりはるか以前にメールで素っ気無くも伝えられたときのことを思い出していた。

スタートはいっしょでも、今や先を歩んでいるシヨウコ。僕も今、岐路に立っている。海を越えて、大陸に渡るか。新たな、人生最大であろう局面。

僕にはシヨウコほどの決断力も実行力もないけれど、勝手にも見返してやりたい気持ちが高ぶってきている。そのためにも、このチャンスは逃せない。

午後は出先から少し足を伸ばして、東京湾へ。きらきらしている水面には、何が映されるのか。いや、そんなことよりも、「あの海は、もうしばらくは見ない」と最後のサヨナラを東京湾に捨てる。海は、つながっているわけだし。今、潮風は、シヨウコが向かった先とは違う方向に流れていく。僕は、その潮流に乗るだけなんだ。

<おしまい>

P i e c e 6 「午睡の小悪魔、奔放な天使、愛すべき横顔」

シェリルは実に奔放なタイプだ。

さすが、そこいらの日本人にはない国際性というか、行動が目を見張るくらいに突拍子ない。

まさに香港から来たバラエティ向けタレントが、テレビでしゃべっているみたいな歯切れの良さと、微妙な滑稽さがあいまったというか。そのへんが特に好き。

同じ大学に通う、彼女は香港からの留学生にして才女。広東語と日本語と英語をペラペラと使い分ける。僕よりも年上で、基本は姉御肌だ。小気味いい。

「最近、バイト忙しそうだね」

ひがなどこでも絵を描いている僕とは違って、彼女は国際運輸会社で、テレフォンオペレーターとして働いていたり、高級中華料理の店でウェイトレスしてたり、僕なんかとデートするヒマもないくらいに勉強以外でも忙しい。

別に付き合っていないけど、彼女はオトコがいなくなると、すぐ僕を頼ってくる。

「カズー、少しはワタシのバイト手伝ってよ。家賃払えなくなるよー」

「おれといっしょに住む？ ロフトの部分、貸すから」

「いやよー、散らかってて、座るところもないじゃん。あの変な絵も邪魔くさいしー」

「そりゃーないでしょー、シェリルさんちも汚いじゃんかー」

僕は彼女が日本語を話すときの、語尾をあげるかわいいクセをまねてからかう。

めったに人が憩わないキャンパスの屋上で、僕らはベタ座りのまま並んで風に吹かれながら、じゃれあっている。この時間が結構好きだな。

僕はそれから傍らのスケッチブックを開くと、うつらうつら午睡に落ちそうな彼女の横顔を描いていく。鉛筆を走らせながらも、彼女の横顔の向こうにある青空具合がフラッシュバックを誘発。

ああ、入学して間もないこんな時期だったかな、と彼女との出会いを思い出したりしている。あのとき、ふいに彼女の方から勢いよく声をかけてきて、僕らの付き合いは始まった。

もう、4年が経つ。彼女は卒業したら、今度はオーストラリアに留学すると言っていた。おいおい、30歳になっちゃうじゃん。一体どんなレディーになろうというのか。

「またワタシの絵を描こうとしてるー。だめよー、今日、あんまりお化粧してないよー」

「知ってるよー、ボクの方が好きよー。いいじゃない、写真じゃないしさ。そんなに鮮明に描きませんよ。スッピンでも、シェリー、キレイだよー」

シェリルがうとうとしていた間に、彼女の顔の部分はあつという間に描きあげてしまった。ま、これまでも何枚か、こっそりと描いてみたりしたからな。リアルにスケッチしたことは、でもこれが最初で最後かもしれない。なかなか、どうして機会が無かったのか。変に照れて、言い出せないし。やっぱり、好きなんだな。

「シェリルさん、午後の講義は出ないんですか？」

「いいの。ちよとねむたいよー。少し、こうして寝ててもいいかな」
すすつと寄ってきて、ころんと僕の肩に寄りかかって、すぐにスーッと寝息をたてる彼女。艶やかな黒髪がさらさらと時折そよぐ。僕は、時期を先取りしすぎだろう薄着の彼女の肩に、黙って脱いであった自分のパーカーをかけてやる。

「そーゆー優しいトコ、好きよー」

と、寝言みたく彼女は微笑を浮かべてつぶやいた。遠慮なく、全体重が預けられてくる。

こうして翻弄されて4年が過ぎるんだろうな。姉貴みたいで、妹みたいで、従兄弟みたいな、友達みたいな、そして、カノジョみ

たいなシェリル。

この国を、僕のことを忘れないでよ、そんな思いを込めて、僕は油性の黒ペンで隣の彼女のほっぺにうずまきを描いた。

最高傑作、完成。

<おしまい>

今日は、遠くまで走ろう。

僕は相棒である、コンパクトカーの代名詞みたいな社用車を乱暴に駆ると、高速道に入り、さらにアクセラレーション。シールドに叩きつけられる大粒の雨ものともせずに、シャーシャーと飛沫を上げてかっぱす。

このところ、成績が良くない。まったく売り上げが伸びない上に、不景気という言葉で逃げてしまえば、これも仕方のないことだが、顧客の反応も冴えない。苦しい時期は続く。抜け出せない、暗闇。ステアリングを握る傍ら、つい、タバコに手が伸びてしまう。荒れてるな、と思う。考える時間が欲しい。そんなときは、とりわけ遠方の顧客をターゲットに営業に出る。移動時間の車中、何やら試行錯誤、一応に考えてはみるんだ。

家族のために、踏ん張っている先輩のタナベさんを思い出し、まだまだやり方があると、見習いながらも、あそこまで出来るのか、とも思う。時折迷うあまり、実際の運転もおぼつかなくなるほど。強烈なストレスに、内臓が軋む思いで、のた打ち回っている。

梅雨の本降りの中で、気分も滅入ることこの上ないが、前に見える1台、2台と次々に抜き去っていく。

窓を開けて叫んだ。雨水を浴びながらも、懺悔するみたいに身を呈し、アクセルを踏み続けて、まっすぐに突き抜ける。

意味がわからない。こんな様、警察に見咎められたら、則時に路側帯で停止だ。

発狂しながらも、得意先の一軒に飛び込むと、モノは相変わらず買ってくれなかったものの、社長が「昼、まだなんだろ」とカツ丼を食わしてくれた。暗い世間話と、僕の社内での不甲斐なさからのグチに対して、優しく諭すような大先輩の格言が身にしみる。そして、締めくくるように「おれだって家族で心中しそうだぜ」と、カ

ツ井をかきこみながら、社長は零細企業の行く末を悲観しながらも、笑ってそう言った。

あまり気づかなかったが、こうして多くの人間が、家族のために踏ん張る意地を見ている。

まだまだ、これから。

それから何軒かをたずねて、空振りが続いたあげくにボウズだったものの、戦う気負いを持ち直した気がする。

帰り路は幾分大人しめに、背後からオレンジのビームを受けながら。ネオンが点り始めた、紫色の街へと向かって高速を駆ける。

帰社すると、きついお叱りやら嫌味やらが待っている。端からそれを順番に飲み降していなくては、明日が来ない！

僕と相棒の周りは黄金色に輝き始め、明日の晴天に向かってワープしていく。重く垂れ込めていた雲が拡散し始めている。

ストレスなんぞ、全部飲み溜めてやる。とにかく、週末まで逃げきろう。時限式に爆発するのはまだまだ先の話。

小川のような水たまりには、僕にはまだ見えない虹が映っていた。その虹に、知らない間に導かれるように、相棒はごきげんのエン

ジン音を轟かせて、僕は鼻歌まじりで。

ぐんぐんと、一つ目の暗闇の切れ間に飛び出していく。いっそ、明後日まで飛び越えてしまおうか！

<おしまい>

P i e c e 8 「未来のアーティスト、幸せのピスタチオの魔法」

「びしゅたちお、うまい？ マナ、じょうず？」

我が子ながら、マナミは天才的に絵がうまい、と思う。いつみても、ウケる。

今日の傑作は、僕が昨晩食べていた、ピスタチオの残り。これが、そのうちに、ピスタチオマンになるんだよ、なんて冗談を言ったとたん、真に受けて、いつも愛用のお絵かき帳に、たちまちピスタチオみたいなのに目鼻がついて、手足まで伸びた、怪人ピスタチオが出来上がった。“アホ絵”と僕は呼んでいるが、幼子が描くイタズラな絵なのだから、当然、自由奔放、のびのびとした感性、なんだろう。頭の中までは、よくわからないが、そのまま体现されているんだと思う。それもめいっばいに。

僕は、そんな3歳の彼女の成長を優しく見守っているものの、そんな自由に家のあちこちに落書きするアーティストに対して、母親である僕の妻ミナコは厳しくしつけようとする。当然、甘いのは僕の方。

「また、変なこと教えないでよ。このコお嫁にいけなくなっちゃうでしょ」

カゴいっぱい洗濯物を運びながら、疎ましげに横切るミナコ。

「マナミの絵はすぐウケるよ。おれ、ケータイの待ち受けにしているし。見せるたびに、みんな、感性がすごいって言うもんね。マナミの絵をみんなに配ってるんだ。壁紙ダウンロードサービス、できそうだな。これだけ人気があるから、マナちゃん、将来はモテモテだね」

「マナ、もてもてー？ いっぱい、けっこんできるー？」

「いっぱい、しちゃあいけないな。パパだけにしておこうか」

「うん。そうするー」

と言ったあと、僕はマナミの頭をくしゃくしゃーってしてやると、

彼女は顔をくすぐったそうにして喜ぶ。やわらかい髪の毛だ。ママに似てる。

ピスタチオの殻をむいて、マナミに与えてみる。子猫みたいに僕の掌に口をつけて、ついばむようにして食べようとする。

「ちよっと、そんなかたいものの食べさせないでよ」

「いいじゃん。興味あるもんねー、マナ？」

「マナ、それ食べちゃうと、ピスタチオマンになっちゃうよ。ちよっとパパ、マナミが喉に詰まらせちゃうって」

マナミは、自分が描いたピスタチオマンに大喜びで、ずっと見せつけては、自分が一番笑っている。彼女にとっては“ぴしゅたちおまん”だが。

「そろそろマナミに英語習わせたいんだけど」

「早くないか？ 今から習わせたら、ペラペラ上達しちゃって、アメリカとかに留学したい、とかなっちゃうじゃん」

「そこまでは。だけど、早いうちからやっというたら、将来、英語で苦勞しないんじゃないの。これからは、私たちのときより国際化が進むよ、きっと」

「マナミは、それよりもダンスとかやりたいんじゃないの？ まあ、英語でも何でも楽しんでやるタイプだろうけれど」

と、先ほども、背中によじ登りたがっているとはかり思っていた、いたずらな天使が、ふいに「できたー」と声を上げてはしゃいだ。彼女の手には、大好きな青のクレヨンが。いやな予感が。

「あっ」と向かい合っているミナコが察したように僕の背中をのぞく。

「やっちゃったね。マナ、なーに、これ」

「ぴしゅたちおパパ」

屈託のない笑顔の指し示す眼前には、というか僕の無地のTシャツの背中には、いつのまにか大迫力のアホ絵“ぴしゅたちおパパ”が、バックプリントになっていた。こいつは、やりますなあ。

Tシャツを脱いで、確認してみる。おもしろっ。でも、これ、気

に入ってたTシャツなんだけど。

「ふはははー。うまいー？ うまいー？ ねー、ねー」

上手だねって言うてもらいたいんだろー、いつもの地団駄踏むみたいなダンスをしながら、また笑ってる。

僕は、マナミのくすぐったがるわき腹を捕まえてから、その小さな頭をくしゃくしゃくしゃーといつもの倍の回数掻き混ぜてやった。

勢いのいい甲高い笑い声がパタパタと遠のきながら、洗濯カゴを蹴散らすと、洗濯物が散らばって、一層にぎやかな空間になった。

ミナコがあきれたふうに笑っている。これも、幸せ、なんだよだな。

僕はピスタチオの殻の隙間から様子を覗きながら、”ピース、タチオ”なんてフレーズをつぶやいていた。

<おしまい>

P i e c e 9 「深夜徘徊、チャージするは己の欲望」

「ダテくん、次、いくぞ。こんなシケた飲み方じゃ、朝までもたねえ」

今宵のヤタバさんは、強烈なリーダーシップを発揮している。

かつて硬派なヤンキーだったらしいヤタバ先輩は、仕事中は温厚で礼儀正しいが、その酒豪の度合いを超えて飲み費やすと、たちどころにやんちゃだったころのフラッシュバックが起こるらしい。にしても、たち悪く暴れるわけではなく、貫禄が増すというか、腰と目と胆と、至るところどっしりとすわるといえるか。いや、いっしょに酔いながらも、そのせいでカッコいいと思わせる、夜の帝王の風格を帯びる。

おれも、そこそこ酒は強いほうなので、よくつきあうものの、なかなかヤタバさんのこんな姿には遭遇しない。

袖引きがいまだに横行する、ダサイ歓楽街が良く似合うおれたち二人だが、ヤクザで危険な香りすら漂うこの一角にあっても、なんら恐れる気持ちがないのは、単に酔っ払っているばかりではなくて、ヤタバさんという頼もしいアニキの傍にいるからだ。ソフトリーゼントの髪が、夜風を受けて男気を増す。

二次会の後に、完全に宴はお開きかと思いき、終電間際の駅に歩を進めていた矢先、名残惜しい声でもってまだ飲み足りないと言電話がかかってきた。ヤタバ先輩の願いならと、おれは踵を返して歓楽街に戻る。消えないネオンに向かって、朝まで奮い立つよう氣力を充填しなおし、明けるのかわからない夜空を仰いだ。

「いきますかー、ヤタバさん。夜は、まだ長いつすね。明日なんか、くそくらえッスよー」

おれは、何度か経験しているが、ヤタバさんはこうやって会社でのストレスをたまにどかんと発散する。一晚中遊ぶのが、どうやらウチの夜王の流儀みたいだ。

決して愚痴と人の悪口は言わない。それもあって、後輩はこぞつてヤタベさんを慕ってくるが、その分のフォローもして面倒もちやんとみる。

売上については針の筵。営業3課は吊るし上げられ、課長のヤタベさんは本当に苦しい。なのに、大事な愛娘が病を克服できるような父親として尽力している。

すぐ横の席のおれは、それだけにヤタベさんの力になりたいと、日頃からうずうずしている。課全体の成績を好転させるような奇跡はすぐには起こせないが、小さな奇跡くらい起こして、何かしら気持ちいをハッピーにしたいじゃない。

であるなら、何もかも忘れて遊んじゃうのもありでしょう。解放して、ひとときのトリップ、庶民が出来うる最大限の贅沢。無駄遣い。今日のような姿、なかなかみるもんじゃないし。付き合いますよ！

さっそく、勢い勇んでキャバクラに乗り込んだ。それから、どうしましょうか。騒音の中、ギャルを抱っこしたまま剥き出しの乳房を吸ってやる。もはや、硬派がやることとは思えません！ おれたちには酒が足りないんだ。閉店なんかでおれたちを終わらせないでくれ。

それから、路頭に迷うおれたちを救ってくれた、愛子ママは朝までヤタベさんとチークを踊るのかい。熟女の魅力におれも思わず口づけ。まるで上海の夜会。

そうして、最終的にチャイナパブで落ち着いて、週の折り返しともいえる夜をようやくと越していく。おれたちふたりは、もはや仕事のことなんて口にしない。例え朝が現実を突き付けようと、その扉をノックしても、時間いっぱいまでしらを切って踊っているんだ。飲んでいるんだ。

ようやくヤタベさんが、くわえるタバコの隙間から本当の笑顔を見せた。

上海まで、遠かったよ。愛子ママのマジック、上海のバンドネオ

ン。

「ダテくん。おまえも踊れよ。それから、もっと飲めよ。まだ、夜が明けてないんだぜ、きつと」

そう言っ、ヤタベさんはロックの焼酎をあおると、愛子ママとまたイイ感じに。

どこまで底なしなんだろう。そろそろおれ、限界です……

<おしまい>

P i e c e 10 「再起を誓え、女神の元へと舞い戻る時」

ニシハタさん、どうしているかな。まだ、あのデカイ広告代理店で、ステキに仕事しているのかな。結婚できたのかな。

ニシハタさん、おれ、最近ようやく社会の仕組みが理解できてきたよ。

思い出すだけで、恥ずかしいけど、あの頃のおれはほんとにコードモだったな。取引先の仕事相手として、なんて一切みられてなかったのは、よく理解している。なんか、弟みたいだって、いつも頼りないおれを諭すようにして、おれにとっては女神様だったけどな。訪れるたびに、おれのカノジョとのことや、どこそこのお店の何がうまいとか、筋トレの話とか、大好きなニューヨークについてやら、そんな茶飲み話ばかり。持っていく手土産は、ニシハタさんが好きな、あの店のマドレーヌばかり。

仕事にやり甲斐を感じていられたのは、ただニシハタさんとのやりとりだけだったかな。納期がギリでも、徹夜でも、ズブ濡れになってもがんばれた、唯一の努力。けど、社内では認められない成果。「月曜日の憂鬱」、日曜の夜からのあれね。シンドロームみたいで、ワタシは今になっても慣れないよ。特に、早朝から定例待ってると思うとね。いくら週末に踊って発散しても、また始まるのかって思うと鬱蒼とした気分になるのはねー、どんだけ歳月経ても変わらないよね。サイクルだもんね、こういう」

諭すように、言いながらも共感してくれる。そこに癒しがあった。あの頃、ビジネス界において、インターネットがにわかに活気づいてきていた。万能で、無限の可能性を秘めているような。しかし、パンドラの箱。おれは、ビジネスのなんたるかを大して知りもしないのに、目の前に大海が開けた感覚で、それからまっしぐら。

「まだ若いから、チャンスはいくらでもあるよ。挑み続ける意気込みを忘れなければね。でも、なんか残念だな。ソウシくん来てくれ

ると、結構和むから。いなくなると、さみしいかもね」

早すぎた。あの時点で、あのときの仕事すら、満足にこなせないままだったのに、雇用のミスマッチをいいことに早期離職。ITバブルに踊らされるとも知らずに、期待に胸を膨らませて、それはそれはニシハタさんの巨乳よりも膨らませて。

そうやって、飛び出した。

「卑屈になることはないし、胸張っていけば、そのうちうまくいくんだよ。自信を持つことだね。そのメガネだって、ワタシは似合うと思うよ」

営業行くにはハデだと言われたフレームのメガネで、早くもクリエーター気取りのおれ。

でも、おれはその言葉で、生き返った。やりたいことを通すわがまま。

お別れの挨拶のとき、オトコっぽくなったと、少し認めてもらったような言葉をくれた。胸を張って歩けるようにならずにちや。ニシハタさんも、「巨乳ですけど、なにか！」って、いつも胸張ってたもんな。

それから、会社を辞めて、浮き沈みを経て、しばらく不遇だったけど、這い上がってきたよ。失われた10年、流れて、流されて、それだけの時間を漂流したけれど、でも、再び、なんの縁だろう、こうしてまた、あの頃よりデカくなっている、ニシハタさんの広告代理店の前に立ってる。

おれ、また一段と、オトナになったんだぜ、ニシハタさん。

さあ、これからプレゼンだ。胸を張って、いこうか。

<おしまい>

P i e c e 11 「魂の浄化、心奪う音楽の虜」

ライオンキングにも心奮わされることない僕が、“春の演奏会”なんて席に紛れている。

音の高低、旋律の緩慢なんかで、果たして僕は心動かされるのだろうか。

妙な縁で、僕は音大生のカノジョが出来た。

ドデカい野外ライブ、ロックバンドが競合するサマーフェスで知り合ったものの、当時カノジョは友達に拿捕されてきたようなもので、当の僕らとは気合の入れようが異なっていた。

社会人になった今も連綿と続く夏の恒例儀式。仲間とテント背負って湖のほとりの会場まで遠征して、焼けるような昼夜、いやいや連夜寝る間も惜しんで発狂する。学生のうちから通っているものはじめはオトコ3人の所帯も、社会人となると、急にカネ回りが良くなったのか、同伴で来てみたり、数は微妙に増減するものの、5〜7人、男女入り混じってのフォーメーションが定着してきていた。

その年は、車に収容できるMAX、男女7人恋物語の夏だったのだ。物静かな僕も、年に一度このときばかりは祭りを担ぐ。まあ、酒が入ればテンションあがるだけなんだけど。行きの車中で、初対面のカノジョと静かなる者同士寄り合いながら、会場でも微妙に気を使いながら、スロースターターな二人は、最終日にしてようやく手を振り上げていた。「合わせてくれて、ありがとう」と、それからカノジョのペースに合わせながら、付き合いが始まった。

今宵、カノジョの通う音大の室内楽演奏会。

フルート奏者で登壇するカノジョは、アンサンブルでモーツァルトの交響曲を演奏するらしい。大人しいカノジョはすっかり皆の中に埋もれて、でも、いつになくテラントランの上品な衣装が美しい。そして、鳥がさえざるようにして、気持ちよさそうにメロディにのっている。

“奏でる”ってこういうことかあと、ズンドコ心を砕くような爆音や、尖った刃で突き刺すような鋭利で攻撃的な音とは別に、心底安らげる心地よさに包まれていく。カノジョはこの姿を僕に見せたかったのかな。そして、好きになってもらいたい、カノジョの世界観とともに。合わせてもらっている、それだけではなくて、見守ってもらいたいっていう強い意志。応えてあげたい、そう確かに思わせる、不覚にも心動かされた場面。

素晴らしいと思った。

最後に女神が降臨してしまうまでは。

そう、音楽は魔性。

トリを飾る美しいピアニストが奏でる、この世のものとは思えない、セイレーンの嘆き。鍵盤に触れる指先が、僕の心の琴線を直接弾くように届く。ピアニストが切なく見つめる宙空には、まるで捕らわれた僕の魂が浮かんでいるような。

そうして、旋律に絡めとられた僕は、動けないままに喝采を浴びてステージを去る魔性のピアニストに完全に心奪われた。

どうやって、この後、カノジョに話をしようか。僕が落としたままの視界には、プログラム最後に記された、美人ピアニストの名前と、ベートヴェンのピアノソナタのナンバーが、この後翻弄される運命のタイトルのように刻まれていた。

音楽って、すごい！

<おしまい>

P i e c e 1 2 「流星が降り注ぎ、オーロラがたなびく、天が墮ちる結末」

あれは6月17日の夜だった、と思う。

ぼんやり夜空を眺めていた僕は、悠々と頭上を滑るように音もなく通過するUFOを見たんだ。天の川が見事に横たわっているのを仰ぎ見るようにして、僕は蛙の大合唱の中、優しい夜風に吹かれて田んぼの土手に腰を下ろしていた。ホテルがちらほらと、そう、幼少期よりも数は減ったかと思うが、あのときまではまだ飛び交う姿が自然に見られたんだ。

とはいえ、その微かな光に見間違えたわけでもなく、ちゃんと夜空をすうっと横切る黒い円盤状の物体。それは、音もたてないどころか、光も外部に漏らさず、漆黒の闇に溶け込む忍者のように、人知れず徘徊しているんだと確信した。

これは僕の持論だが、発光物体として、きらめくほど目立つ存在感はないわけで、隠密行動をとってこそUFOであろうと。そもそも、人目についてはいけないのだと思う。だから、その枠に当てはまるかたちで出現したことに納得するわけで、本当に、ホンモノなんだ、と強く信じて疑わない。

しかし、あの頃と今は大きく変わって、星空が地上の明かりに負けて天地が逆転したような都会に移り、年月を経て童心を忘れてしまい、そもそも“天の川”なんてキーワードすら浮かばなくなるほど忙しい生活に埋めると、僕は自らの荒んだ心を残念に思うよりも、過去に遡るべくインナースペースにダイブした瞬間、郷愁にも似た気持ちと懐かしさに包まれて、泥のように眠っているという現実。

説明のつかないものは嘘だなんて、眉に唾つけて真っ先に否定するようなことはしなかったし、むしろ、未知なるものとの遭遇にロマンを感じて、きっとそれが“少年ハート”だったのだろう。あれほど夢中になれたもの、夢が、想像が広がる世界。それが確かにあ

った。

それでも、まやかしではないにしても、ひとつずつそれらの世界は縮小していった、大人になる頃には、半径数キロといったフィードルダにわかに現実味を帯びて、日常に顔を付き合わせるものたちのほうが、はるかにミステリーと気づく。

いわんや女体の神秘。思春期は、少年から大人へと変わるために潜る羅生門。人は生きていくために変わるもの。しかし、変わったことに気づくのは、その門を潜り抜けてしばらく経った後。丘の上より望んだ都とはこうも小さかったものかと、これまで育まれた環境に決別するように、己の腕、足、頭で生き抜いていくことを五感に命じたとき、後ろに連なっていた抜け殻を暫時捨て去っていくんだ。

そんなこんなで、女性というエイリアンに幾多も遭遇して現を抜かしている間に、地球は恐ろしく回転して、見ていないところで、気づかないうちに宇宙が至極近づいていた。

遠くを見ることがなくなっていた僕が、そのことに気がついた頃には、昔見た天の川が落っこちそうなくらいすぐ頭上に迫っていて、大河の激流に吞まれるようにして巻き起こる惑星衝突が幾多も確認できた。超銀河ビリヤード。

なんちゃら流星群が、この世の終わりのように幾筋も降り注いでくる。不気味なオーロラ。カタストロフィーが大迫力で現実となる。もはやかつて思い描いていたロマンのかけらすらない、未曾有の現象の前に「大丈夫なのかな」と思わず不安をこぼしてしまう。

忘れていたけど、あの時流れていたUFOには、暗い小窓の向こうに人影がいくつか見えた気がする。あれは、いわゆるエイリアンではなくて、あのときどこかに移住を決めた人たちが、窓から見える地上にサヨナラを送る姿だったのかな。

気づくのが、いつも遅すぎる僕は、あのときにすでに乗り遅れていたんだ。

昼も夜もなくなったこの地上に、流星の雨が降り注ぐなか、少年

時代の感傷に浸っている余裕なんて、もうなかった。

<おしまい>

P i e c e 13 「エンドレスサマー、でも、ヌードにならない」

蝉時雨、いや、木漏れ日とともに降り注ぐ合奏のシャワー。

熱風が、そこを抜ける刹那、涼風に生まれ変わる、都会の森。風の胎内潜り、僕のお気に入りへの帰り道だ。

普段は忙しいオフィス街のほとりなので、公園でもあるちょっとしたこの森の小道は、ランチタイムともなると人々が憩う場所となる。

僕は、運動不足の体を気にして最近ウォーキング。会社からの帰宅路は、一駅分そこを含めた行程でスタスタ歩く。

炎天下の日曜日。梅雨明けの強烈な日差しが、「待っていました！」とばかりに、僕の心を海へと誘うものの、ヴァケーションまでには一塊の仕事をやつつきたい。休日出勤が続く中、がまん、ガマン。ほとぼりそうな露を受けながらも、ぐっと堪えるのも、おとこ（漢）の見せ所。今日は、そんな気分で、いつもの小道を逆に歩いていく。

さすがに日頃の疲れが出て、日曜日という甘えにスタートが出遅れ、お昼を回ってしまった。急いで会社でネジ巻いてやらなくちゃ。でも、少しでもカロリー消費を。しかし、そのセコい考えもすぐさま後悔させられるほどの暑さ。「ここはアンダルシアか？」と疑ってしまうくらいに、日向の直射日光は殺人的だ。

行き交う人もまばらな、日曜正午過ぎの、森のトンネル。時折吹き抜ける涼風が、朦朧とする意識を撫でて、やさしく揺り起こす。ふうっと深呼吸すると、草葉の緑濃い香りが懐かしさを呼び起こす。目の前のベンチに、疲れたわけではないが、滴る汗を拭いながら腰掛ける。

頭上から垂れてきている松の枝に語りかける。

「夏に、届いたかね。みんな、にぎやかそうで」。

ここしばらくは松林。そのうち雑木が混じり、やがて桜の並木道

となる。

蟬の声、うまく聞き分けられないほどに雑多。シャワシャワ……、ジワジワジワ……、ミンミンミンミン……。姿は見えないくとも、相当の数が、一帯を支配して、真夏を謳歌している。様々な種類が、少しづつ音色や奏法を変えて、時に独奏してみたりしながら、日が昇っている間は懸命に響かせ合う。

かつては、町のどこに居ても、この一部ではある合奏が聞こえていたんだ。音色に包まれながら、僕は少しの間、回想。純粹で、熱かった、10代の頃の、それも田舎の夏空が、恥ずかしい思い出し笑いとともに、甦る。

僕の田舎の夏は、短い。その短い夏の間に、僕らは蟬同様に情熱を傾ける。命までは費やさないのだけれど。高校最後の夏も、同じようにして過ごしたっけ。夏休みが終わるのが早いわけだけど、そのあたりがちょうど夏祭のピーク。たった二晩だけの、小さな町の盛大な盆祭。そうそう、この2〜3日だけは、過疎の町の人口が2〜3倍に膨れ上がる。

祭はというと、巨大な山車を一晩かけて町中曳き回すもので、その山車はというと、いわば巨大な行灯だろうか。ねぶたの小規模版ともいえる。各ブロックで山車を作成し、祭の夜に備える。巨大な和紙に巨大な絵を描き、彩色し、少ない人手で組み上げて、そそり立たせる。あわせて、その間に囃子を整える。慌しく、祭の用意が進められる。

そうして、夏の旧盆の最中は、青春を制作に捧げていた。

絵を描くのが好きだと主張したのが災いして、爾来、中学生になってからは、裏方で山車の制作を手伝う羽目になった。

ほぼサウナ状態の公民館の中で、日中からねじり鉢巻で障子紙に墨を引く。師匠は齡80を超えて、この時期にあってもいささかも怒号が衰えず、さらには昼間から日本酒をあけている。気合が入っているのか、酔っ払っているのか。とにかく、怖くて、暑苦しくって、いやな作業場だった。

それでも、過疎の町とはいえ、祭は途絶えず、しかし、絵描きの後継者は僕以降途絶えつつあり、後輩がいらないながらも、高校生の間は続けていた。毎年、夏に、暑苦しい（いつまでたってもクーラーなんてしつらえられない）作業場で、黙々と絵を描く。

戦国武者、花魁、浮世絵、歌舞伎絵。いくつもその背景の意図がわからないまま、師匠の爺さんが持つてくる図案を引き伸ばして、彩色する。さすがに、出来上がると、一仕事終えた達成感が毎回あるが、その歳ではまだ、美酒を味わえない。

大した褒美も無い下っ端のまま、その恒例の行事は、僕が高校生活を最後に、田舎を離れたことで終わった。思えば、あの公民館の中で、朝から晩まで蟬にどやされるようにして過ごした日々、ヒグラシが鳴きやんで、スズムシの声に変わる時間まで、それでも夢中で、無心で描いていた。集中すると、音が消える。

高校最後の夏、僕は当時好きだったコに、いっちょまえに仕事ぶりをを見せてやりたくて、初めて女の子を祭に誘った。芽生えたばかりのプライドみたいなものを、初めて大切に思える人に、見てもらいたかった。わかってほしかった。そんな初心なハート。

祭囃子の中を二人抜け出して、肝試しみたいに小学校のグラウンドに出ると、隅っこのジャングルジムの天辺に並んで腰掛けた。町の中心からは賑やかな音・声が溢れてくる。

お互いが、何か言いたげで、でも言い出せない。うつむいたり、途切れた会話を取り繕うように、無理に笑い話を始めて。

あの頃は、まだ流れをつくること、できなかったよな。でも、他愛ない、ドキドキしただけのその時間も、ゆったり夜風に吹かれていたと思うと、清らかなものだった。「好きだ」とも「付き合おう」とも言えなかったアノ瞬間は、今でも思い出すと照れくさい。

それから、確か、太鼓の音が激しくなって、町の中央の交差点に山車が勢ぞろいした合図が轟く。その見せ場を見逃さないためにも遠くから見ているだけではおさまりきらず、僕は彼女の手をとって、あわてて交差点に駆けていった。

太鼓が雷雨のように鳴り、それを乱れ打つ若衆の気合が飛び交う。交差点の四方を巨大な山車が塞ぎ、二階建て相当の行灯となっている山車の放つ明かりで眩いばかり。中央には群集が溢れ、その雑踏の中で、僕ら二人ももみくちゃになりながら、その当時流行っていた、なんちゃらサンバを踊った。

祭が終わると、僕は原チャリのハンドルに、露天で捕まえた二匹の金魚が入った水袋を結わえて、彼女を背中に乗せて、家まで送っていた。ただ、田んぼの続く暗い道を、彼女のかすかに汗ばんだ体温を感じながら、極めて安全運転で、慎重に、慎重に。ムネの感触と、胸の高鳴りを感じながら。

……おっと、いけない、のんびりしすぎた。懐かしさに浸りながら、時を忘れてトリップ。

相変わらず、蝉が容赦なく浴びせてくれる。もはや通奏低音のごとく心にまで染み付いた、幼い頃までも遡り思い起こさせる、変わらない季節の音。

この音が続く限り、僕は幾度となく思い出すのだろう。そして、「夏休み」という幻想。

ベンチから立ち上がると、歓声が響き渡るような木立のトンネルを抜けていく。

早く片付けて、あの夏の日に帰ろう。

この緑のトンネルはタイムワープのゲート。蝉の声が途絶えない限りは、ゲートは在り続けて、真夏の方々へとつながっていく。

南中高度から逸れた陽光が、キラリ木陰を射して、微妙なプリズムの変化を生み出す。迷い込んだ僕は、聞きなれた蝉の声に誘われ、今や、奏でられる音が過去か現在か区別がつかないまま、遠い遠いときめきの彼方へ、魂ごと羽ばたいていった。

心、ここにあらず。

夏空が生んだ、蜃気楼。

／おしま／

P i e c e 14 「現と幻を行き交う、ホタルの光」

ホタルの光は、魂の分光。土地に根付いていた、心優しき精霊が、ヒトに追いやられて水元を辿って根源へと還るという幻想。

ホタルはしめやかに、その疲れきった魂のかけらをその小さな身に集めて、何処かへと静かに運ぶ。中空を漂う、精霊流し。

わたしがまだ幼い頃、夜の田んぼには、漁火のようにかすかな明かりが点在していて、ときに小さな妖精が一斉に演奏しているのだと思ったりもした。迷いホタル。家の中にも、まれにひとつふたつ、小さな明かりが迷い込んできた。

今は、水は枯れて、また濁り、草葉が揺れてもそこに揺らめく明かりは無い。これが山奥ならば、まだいくつか見て取れるだろうに。わたしが大人にもならないうちに、彼らは里から姿を消していった。彼らの季節が巡ってきても、いつしか姿を見せないのが当たり前となって、わたしは気落ちするでもなく、いつの間にもその個体数が目減りしていったものなのか、または一斉に奥地に引っ込んでいったものなのか、そんなことすら記憶に無くなっていた。

わたしといっしょに、でも、なんだか悲しいことを言いながら、あの川岸で、どこかへ向かうホタルの群れを眺めていたシュウちゃん。彼も、いったいいつの間に居なくなったのか、わたしの幼い頃の記憶には、その当時観ていたアニメの初回のストーリーくらいに判然としない。

転校生でもない、もちろん、ほかの友達の記憶にも存在しない、ザシキワラシみたいなのシュウちゃん。それでも、わたしと祖母だけは、なぜかシュウちゃんを憶えていた。いつも保育園に行くのを嫌がっていたわたし。祖母はそんなわたしに困るふうでもなく、一人っ子で遊び相手のいないわたしのわがままをきいてくれていた。

そのうち、裏の田んぼの畦道を辿って、いつしかシュウちゃんについて、当時のわたしと同じくらいの年の男の子が遊びに来るよう

になった。裏庭で、一人遊びしているわたしのところに、決まって夕方からのほんの数時間ほどだろうか。わたしが外にいるときに限って、ひよっこり現れる。

わたしの思い出の中では、シュウちゃんはいつもだらんとしたラニンングシャツをたるませて、短パンにサンダル履きだったようなそれというのも、シュウちゃんと会っていたのは、ある夏の短い間だけだったからなのか。

共働きの両親は、いつも帰りが遅い。それまで、いつも祖母と二人。だから、シュウちゃんがたまに加わると、早めの楽しい夕食になっていた気がする。シュウちゃんとは、どんなこと、話していたんだっけ。ザシキワラシみたいなのシュウちゃんは、ふざけたマネが大好きで、よく猿のマネして笑わせてくれた。

そんな、ひょうきんな姿と相對する、いつかの夏、最後の晩の、ホテルの行列を見送る表情。確か、シュウちゃんは悲しい顔して、あの頃のわたしにはまだむずかしかったような言葉を、ぽつりとつぶやいて、それっきり訪れなくなったんだ。

川面を滑るように大挙して、いずこかへ静かに移動していったホテルの群。シュウちゃんはその群の中に、ひっそりと紛れてくっついていてしまったのかもしれない。

そうして、祖母も、実はシュウちゃんは何者なのか、知っていたのかもしれない。でも、それをわたしに語ることなく、祖母は他界した。

それから、生活の変化を幾多も経ながら、わたしも成長していき、何気ない雑多な生活の喧噪にもまれるようになるにつれ、記憶の最下層の部分は沈殿したままとなって、時を止めていた。一人遊びが好きだったわたしも、そのへんの誰それと変わらない生活を送るようになって、都会の片隅の、いつしか小さな家庭でささやかな生活を営んでいる。人並みの悩みを抱えながら。

とある初夏の宵、わたしはダンナとふたりで、庭園が美しい近所の大学のキャンパスへと、納涼の催しに出かけた。そこには、小さ

なジオトープがあり、たくましい生態系が宿り、経年で育まれたホタルの生息が確認できるという。

風の静かな、初夏のほの暗いキャンパスの湖沼にちらほらと、行き先を迷うようにして、かすかに明滅する小さなランプ。間違いなく、ホタルが息づいていた。

そのことに、わたしはダンナの腕にしがみつきながら、なんだかジンと胸の内から気持ちを呼び起こされるものに、耐えるつもりで涙をこらえていた。いのちのかがやき。つぶやくと、なんだかたいそんな響きだが、思わず口をついてでたその言葉に、ダンナも優しくうなずいた。

しばらく二人で眺めていると、いつしかわたしたちの周りに輝きが集まりはじめて、ちよつと照れくさい演出になってきた。あれれ、彼らはなにかに引き寄せられているのかな。

ながらく子どもを授かることの無かったわたしの、うつすら膨らんだおなかに、いたずらにホタルが一匹止まった。祝福するように、話しかけるように、優しく、そして小さな呼吸に合わせるように、ゆったりとその明かりを瞬かせて、安らいでいる。

なんだ、きみらふたり、ホタルに好かれたね、と隣のダンナが、わたしとおなかの子に、そして小さな来客に微笑んでいる。

この瞬間、わたしは幼い頃のおぼろげな優しい記憶を、あふれるように思い出していた。わたしには、シュウちゃんがお祝いしに来てくれたんだってことが、ちゃんとわかった。

お友達になりたいって、このコが言ってるよって、ダンナに言ってみたら、優しく笑ってくれたけど、彼にもやっぱりシュウちゃんの姿は見えない。わたしにも姿は見えないけど、気持ちがつながった気がしていた。

シュウちゃんの優しさが、わたしの住むこの街にも溢れていくと、きつといいのになあ。

ぼんやりそう思ったら、池の端の草葉の陰から、これまで恥ずかしそうに身を潜めていた仲間達が、賑やかに飛び出していた。

ふわふわと、ちらほらしていた小さな揺らめきが、みるみる重な
って、遠い街の明かりを打ち消していく。きらきらと天に昇る前兆
の神々しさを伴って、たくさん親子連れの歓声を受けながら、ま
るで楽しげに舞っていく。

ビオトープの周りでは、みんながあんぐり。

わたしのおなかにとまっていたシュウちゃんみたいなホタルも、
じゃあねって、あのとときにはまるで違う、にこやかな笑顔をほんの
り浮かべたかと思うと、先に行くみんなを追いかけて飛び立った。

すごいっぱいいいたんだね、とダンナが感嘆している横でわたし
は、いっしょだとさみしくないんだよね、とその姿を見送っていた。
あるとき、哀しげな顔して別れたのとは違う気持ちで、今度はちゃ
んと手を振っている。でも、シュウちゃんとは、また逢える気がす
る。そして、あんなに、仲間もいたんだね。

よたよたしてたり、ふざけあってるみたいに宙を漂う。あはは、
みんな恥ずかしがり屋さんだから。星に還る前に、たくさん遊んで
いくんだよ。

<おしまい>

P i e c e 15 「甲子園、熱戦の蜷気楼に浮かんだもの」

真夏の高校野球、甲子園での熱闘が始まった。

蜷気楼に揺れる、マウンド。揺れる、エースの送球。高ぶるアルプススタンド。吠えるナイン。

バットから、快音。打球を吸い込む、青空。かちわりの氷。白熱。少女の、まっすぐな、想い。仲間からの、エール。

魔物が、白球を、手ぐすね引いて、待ちかまえる。

気温、36度超。体感温度はさらに上昇。熱病に、冒される。舞い上がる、砂塵。

刹那、駆け抜ける、躍動と、歓声。轟きと、うねり。ヒートアップ。

なんだろう。十代の、熱い想いを、ストレートにぶつけられて、溜まった夏休みの宿題を忘れているうちゅう、夢中だった時間を何度もこの時期に、思い出させられる。

別に、高校球児だったわけではないのに。彼らの、実直な、純粋な目が、しなびた大人のハートを射て、毒素を吸い出していく。盛夏の、デトックス。成果、出とるッス。

いま、ビールを片手にテレビを眺めている。大人のしどけない姿。この夏の高校球児は、特に輝いている。なんといっても、僕の出身校がトーナメントをはい上がってくるキセキ。休日と重なったこの準決勝ですら、気持ちが高ハイになつては、ハラハラドキドキがおさまらない。

それで、昼間から観戦しながらつつい。文句なしに、掛け値なしにハツラツとしているナイン。いや、ベンチもスタンドも。さらに遙か故郷でテレビを囲む観衆でさえも。みんなが一体となった、まさに燃え盛る太陽。一喜一憂しながら声を中空に放つ。

あの頃のように、僕も。気がつけば、缶ビールを握りつぶしそうな勢いで、その場に立ち上がって、青春の渦に呑み込まれていた。

「いけ！」とか「よっしゃ！」なんて、クール気取ってる僕が、ガラにもなく呟いて。

僕にだって、もはや過ぎ去ってしまったが、舞台に立っていた時期があったんだ。高校時代。その舞台は、甲子園のように砂塵が舞う、クレイコート。ペアで競う、ソフトテニス。

結構な名門校で、確かに当時野球は強くはなかったが、ソフトテニスと陸上が際だっていた。僕はそのソフトテニス部で、不思議と呼吸の合う相方と巡り会い、引退前には県でもナンバー3に入るまでになった。相方。そんな呼び方が、思い出してみるとしっくりくる。

彼は、いまどうしているだろうか。僕のパートナーで前衛をつとめていた、飄々としていた彼。「ラッキーだあ！」と言っては試合中自分を鼓舞する彼。背が高くて華奢な彼。見たカンジは理系男子だったよな。

部活以外では付き合うこともなかったけど。野球のバッテリーほどの関係なのかは、端から見てもわからないのだろうけれど、僕らの間にも阿云の呼吸は確かに存在した。放課後の数時間だけで、それは培われるのだ、確かに。と、考えてみれば、部活以外での彼の姿、横顔は、あまり知らない。

でも、確実に、あのちっちゃな栄光の瞬間を分かち合った二人である事実には変わりはない。そうだな、どうしているんだろうか、彼は。

カキーンと、乾いた金属音がテレビから聞こえた。

守りに入っていた我が母校が、どデカイ砲弾を浴びた。走者一掃、満塁のホームラン。相手校、歓喜に沸くチアリーダーの、泣きそうな笑顔。僕も、それに対比する、割れんばかりの悲痛なる絶叫をあげる。それから試合は流れがついて、僕の母校は、その日のうちに甲子園の砂をかき集めて田舎に引き返す運命に。

わかる、その気持ち。最高の舞台まで届かず、雌雄を決するまでに至らない、悔しさよ。嗚呼、かつての我が相方よ、今頃この事件

をどこかで分かちあえているのか。

急速に、彼に会いたくなかった。自然と疎遠になっただけで、別段喧嘩別れだったわけじゃないしな。

青春パワーに煽られて、かつての清涼なる漲る力を、再びこの身に宿したい。あれから、僕らはどう変わったのか。忘れた気持ちを、再び語り合ってみたくなった。十年も経って、僕たちはどう変わったのか。まっすぐ、仲間を信じていられた、あの純粋な時間は。

青空に一旦高くあがり、スタンドに吸い込まれた白球をカメラの目線で追いながら、僕の前に立つ、あの時のネット前の相方の背中が重なって浮かんでいた。

恐ろしく大きな気持ちを呑み込んだ、あのたった一個の白球が、様々なドラマの幕開けや、踏み出す一歩、渴望、思い出なんかを虚空に運んでいった。

ありがとう。さわやかナインの残してくれた感動が、僕が興奮とともに空けていった缶ビールの残骸を、さっさと片付けるよう促す。大丈夫、腐った気持ちのままじゃないんだ。

サンキュー、サンキュー！

まだ、熱くなれる少年ハートが、残っていた。

<おしまい>

P i e c e 16 「金木犀、期待感高める芳香」

金木犀の香りが、街に溢れ出した。

なんだろう、今まで、桜もそうだったけど、これといって子どもの頃を思い出しながら、こんなに漂っていたかなとか、昔からこんなに咲いていたんだっけとか、花や自然で季節を感じることがなかったのが、不思議。

里には紅葉が降りてくる気配はまだない。銀杏並木も、当分は緑でいることだろう。でも、空気だけは澄んできているようで、清々しいと感じる。同じ街並みを、建物が、景観が変わるのを刻々と見てきたつもりだったけど、こうして年老いた母と並んで歩いていると、道程はセピアに溶け込んで封じられそうだ。

そうして、ロマンスの風が吹いている、めっきり欧米人が増えたこの地区の、洒落たテラスが並ぶ“カフェ”の前を、どちらが異邦人やらという気分を通り抜ける。

変わっていく、スピード。

今、わたしたち親子の足並みほどにゆっくりだったろうに、気にも留めないうちに、その気づかなかった者たちは置いてけぼり。気がつけば、もう秋へ。

季節を先取りするべきか、夏の名残に浸っているべきか、まだ迷う。最近では、すぐ見切りをつけてしまう。

この夏に終わった恋も、過去最速のスピードでの破局だった。足並みが、そろわなかった、というか、年下のカレに合わせてもらうのは億劫だった。「結婚」を意識すると、なんだか無味乾燥に儀礼めいて、自分の中ではいっこうに気持ちが高ぶらない。パサパサしてくると、ひどく淡白に物事を処理できるようになって、情も何も介在しないせいか、気に入らないとなるや、関係を丸ごと“えいやっ”と巴投げ出来てしまう。

わたしは、格闘家か。燃えるような、他流試合がしてみたい。そ

れから、引退には、花を添えてほしい。

アホなことを考えながら歩いていたら、目の前の小さな犬を踏みつけそうになっていた。わたしよりも若いコが、ぷるぷる震えるチワワに、悪趣味なボーダーの服を押し着せて、あれはきつと、この先のペット同伴可能のカフェに行くつもりだわ。若いから、余裕なのね。そんな頃から、優雅に気取っちゃって。この土地を、知ったかぶりで、我が物顔で歩くんなんて！ 30年早いわ！

すれ違い様に降臨した、発散しようのないルサンチマンに、わたしの顔はおそらく夜叉に変化していたろう。でも、次の瞬間、ぽつりと母にむかって「わたしも、犬飼おうかな」なんて力なくつぶやいていた。

「やめてよ、うちはただでさえ、あんたっていうおっきなハスキー犬みたいなのいるんだから」

小柄な母は、そう言って豪快に笑う。そうね、この母にして、なぜシベリアンハスキーみたいなのわたしが生まれたのか。なぜか、兄よりもわたしのほうがデカイ。家族で一番、デカイ。

そうこうしていると、目の前には庭園の立派な結婚式場が。古式ゆかしい門構えをくぐると、都会の真ん中にあるとは思えないほどに静寂にしてワビサビの空間。緑がまだ力強い日本庭園を眺めながら、今日は母と割烹で御膳をいただく。

天候ともに良き日、なのか会場はいっぱいのように、割烹の外も賑わっている。遠くには、式を終えたばかりの両家の記念撮影。小柄で可愛らしい姫を真っ白で包む幸せ。

「あんたに合うドレスって、あるのかしらねえ」

ぼんやり見ていたわたしを見透かして、隣で百合根を転がしながら、母があははと笑った。

娘の幸せを、果たして願っているのだろうか。

「オートクチュールでも、つくらせてやるわよっ」

人より背が高いただけたらと思うていたが、少し不安になってきた。クイーンサイズ、あるのかしら。外国製？ ほんとにオーダーメイ

ドになったりするの？ いやいや、大きい方が着こなせるはずなんだわ！

それから、母と庭園を散策しながら、他人の幸せで胸を満たし、小さな丘の上で、風を待った。

来月は、ここで結婚式。お呼ばれだけど。

これだけ幸せがこぼれていれば、まだまだきつと巡りあわせがあるに違いない。

「いい風ね」

小柄な母の頭上を通り抜けて、わたしにも金木犀のやさしい香りをのせた風が届いた。

これは、貿易風なのだろうか。渡り鳥のように、軽やかに新天地へ向かいたい。

とにかく今は、ほどよい気流を、心穏やかにして待っている。

<おしまい>

P i e c e 17 「実直なる土の人、生き方を開示せよ」

冬枯れた大地に還っていく、収穫を終えた寂しさを漂わせる風景。やがてすべてが眠りにつく白い世界を迎える、支度。ここが、僕の生まれた土地。

昨年、秋の始まりの頃、祖父が亡くなった。真夜中に連絡を受けて、朝一番に向かったものの、その兆候すら知らされておらず、寝耳に水、だった。

偉丈夫、だったのだと、通夜に駆けつけた長老たちの昔語りの席では、そんな祖父の豪傑ぶりがちらほらと聞こえた。

ここしばらくはベッドにしばらくだま小さくなってしまった祖父の体つきからは、易々と想像できなくなっていたが。最期、焼かれて出来上がった骨の太さから、それらの話がようやく飲み込めて、骨を拾う旧知の長老たちは口々に「ほらみろ」と、その骨が黙したままでも物語る豪傑ぶりに、僕は「マジかよ」と舌を巻いた。

伝説。父もときどき語りはするが、祖父の超人的なエピソードの其一。超大型台風がこの町を壊滅にした時、町を縦断する川が氾濫し、橋脚が崩れ、川端の家が倒壊するという惨事のなか、流された人を救うために荒縄で身を結わえ、片方を群衆に託すと、濁流に身を投じては次々流された人を救助していったという。

ほかには、山中で、鉈一本で熊と格闘したとかしないとか（さすがに眉唾）。

そんな偉丈夫も、戦争という激動の時代をくぐりぬけ、奇跡的に生還したときには、さすがに骨と皮だけの骸骨みたいな男に変わり果てていたのだと、父は幼い頃にはじめて会った自分の父親の姿について、そう語る。

時代は、高度成長を経て、優しさにあふれた世代が、平和を謳歌する世の中に。この移り変わりを、祖父はどのように思い、静かに過ごしていったのだろうか。

劇的に、生活は豊かになってきたせいかな、それとともに人間としても丸みを帯びて、そんな祖父の温厚な姿が僕の目には普通となっていた。普通に、農作業に従事する、ひたむきな姿。穏やかに、田圃の中に、畑の中に、自然とともに、ゆったりとした姿がとけ込んでいた。

晩秋。ミレーの絵画を彷彿とさせる。土の人。物言わぬ、農民。自然への感謝。

紅葉に染まる山肌とその空気に、僕は祖父の姿をとけ込ませる。重ねていけばいくほどに、自然と溶けていく。今は、「土の人」を背中で体現して、背中で寂しく語る祖父の姿が懐かしい。

実直に生きる、そのことしか、今の僕はまねできない。人は変わると言うけれど、このゆるやかな流れに乗じている現代では、自らが望まなければ、変わることはない。

それとも、僕が頑なに変われることを拒否しているだけなのか。

羊雲が、流れている。いや、流れているのは、僕を乗せたこの超特急のほうか。

目的地へ、まっしぐら。制約ある世界を生きる僕らは、少しでも流れる時間に抗おうとする。あの黄昏に紅く染まる雲のように、群なして留まっている余裕すらない。

僕は、息苦しいこの世の中への鬱憤と、真っ白になってしまった未来予想図を抱えて、一周忌を迎えた祖父のもとへ。聞きたいことは、本当はいっぱいあったんだ。どうして、今頃気がつくのだろうか。

あの雲の群の中に、祖父が跨ったかけらでも見つけられないものか。荒縄が手元にあったなら、今すぐにでも投じて、力一杯にたぐり寄せたい。そう、ようやく気がついて、向き合って語れるくらいに、こっちも齢だけは近づいていつているんだから。今さらながら、祖父には聞きたいことが、山ほどあるんだ。

土の人よ、僕に行き先を示してくれ。

／おしめ／

P i e c e 1 8 「残影、粉雪すら降らない、凍える師走心」

夜の帳が、冷気を一層強めた。

漆黒のカプセルは、地上を隈なくその蓋で瞬く間に閉じていき、水平線に侵食していく。

斜陽が目の前のビルを神々しく射抜いていたかと思ったら、次に遠く窓の外を見上げると、ブラインドの隙間はすぐそこに迫った闇に塞がれていた。

今日も退屈な「僕」を演じるマチネが終わると、あっという間に閉幕となるんだ。むしろ予定時間より早く下ろされたのか。カーテンコールは、無い。

いそいそと忘年会の宴席に足を運ぶ。これより、夜の公演のほうが、熱い。この年が暮れるまで、幾度懺悔のように忘年するのか。実際は、そこで省みられる時間はわずかであり、忘我に等しく誰彼と杯を酌み交わしては、ほぼ平素と変わらず刹那を謳歌する。有象無象にあがる遠慮ない声が木霊する空間は、まさに阿鼻叫喚。

違う。僕が立ちたい舞台は、こんな所ではない。宴席は、ここままでどろどろと仕上がっては、勝手に盛り上がって散々に終息する。場に沈着する前に、ひっそりと抜け出そう。

冬の星座が、イルミネーションの延長にうつすら昇り始めた。街の人の波、掻き分けながらも、去年の暮れとは違う寂寥感に突如襲われ、ボルテージ高まったその人並みに押しやられる。去年なら、クリスマスだって、ロマンスナイトだったよな。

交差点、信号待ちで、一人劇。回顧することこそ、年忘れ。煩悩の数を焼き払うがごとく、大晦日までには思い出の一つ一つをつぶさに焼却処分する。いつまでも、心捕らわれていちゃあ、いけない。しかし、なんで、突然に、ヨーコはいなくなったんだ。その答えが無いことには、前に進めないこと、わかっているけど。無理やりに、今は忘れようと努める。信号機、コンデイショングリーンに。

一人劇が、始まる。

シーン？、MIXのフットサルチームの中で、ヘタなりに一生懸命で、美人で光っていたヨーコ。差し入れるデカイランチボックスが皆に大好評のムードメイカー。

シーン？、やがてそれが僕のランチ専用のドカ弁となっていく。公園でデートしても、いつもの大量料理。

シーン？、よく、バナナを食べながら部屋を歩き回っては、気まぐれに皮を置き去りにする。部屋が彼女のもので占拠され始め、ゴミ屋敷の様相に。

シーン？、フットサルで僕が足を折ったとき、甲斐甲斐しくも身の回りの世話をしてくれたヨーコ。

シーン？、去年のクリスマス、真っ白なサンタガールのコスプレで、いやいつだって楽しませてくれる姿。チキンの衣を「脂っこいから」と全部剥がして食べる。お決まりのリングをプレゼントしても、すごく嬉しそうにしてくれる。

シーン？、クルマから並んで眺めたシールド越しの海岸線。ときどき、海外に行きたいって話を漏らしてた、エキゾチックな横顔。好き。

シーン？、少しずつ、僕の部屋からヨーコのモノが消え始める。生活も、すれ違うことが多くなっていた。結局は、彼女の心を正確には掴めていないんだ。

シーン？、ヨーコが英語のパンフを読んでいることが多くなる。

いつ、この手を離されるのか、気が気ではいられなくなる。

シーン？、僕が、嘘をついた。火遊びをしたのに。しかも、嘘が嫌いなヨーコに対して、見え透いた嘘で。

シーン？、僕だけの部屋に戻り、空虚な跡が春の日差しにぼやけている。後から、僕がプレゼントした、蝶々の形を模した髪留めが転がり出てくる。スローモーションから、しばらくの回想。ヨーコは、もういない。

隙間風って、こんなに身に応えるものだったろうか。芯から凍え

るという、そんな女々しい気持ちをかつては一蹴していたけれど、遠く雄雄しいオリオンの残影でも眺めていないと、静かにこの頬を流星が滑りそうだ。

この物語は、これでアーカイブ。もう二度と演じられることはない。

葬り去る記念に、オリオン座に新たな名前を記して、墓標にすることにした。天空の「砂時計」。形が似ていると思った。未来から現在を経て、過去に流れ落ちる、限りある分量・時間をひとは生きるのだ。あ、誰かが言っていたよね、そんなこと。

冬の星座が見えなくなる頃、きつと緩やかに次のステージに移行している、なんてハピネスを描いてる乙メン・サーティーズ。

聖夜も شایدで駆け抜けて、行く年も来る年もあるがままに、僕はそれでも、奇跡なんて待たない。

だって、こんなに冷え込む夜なのに、粉雪すら舞い降りないんだから。

<おしまい>

P i e c e 19 「エナジーフロウ、墮天使の、少しばかりの温情」

少しばかり調子にのって、つい相手の体温を高めてしまった。アルコールを摂取した相手の体は、オレの見込み以上に早くに、たちまち上気して、その瞬間オレは内心「いける！」と心の叫びを上げた。

バーカウンターでの横並び、斜に構えて向き合ったとき、瞳から瞳の奥に熱気を注入する。あまり成功した試しはないが、今宵、月が満ちているせいか、血が騒ぐのか、互いを対流する気に変化を感じ取れて、思わず発射した。

ビートシンク、鼓動が重なると、恋が始まる。このこと自体は錯覚なんだと思うが、アルコールが判断力を弱め、緊張を緩める。オレが今、逢って間もない彼女とこうして手を触れ合っても、拒否されない不可思議空間が形成されている。

こんなことのために、オレは生まれ持った特殊能力にここまで磨きをかけた。使い道は、これしか知らない。そうして、彼女は火照った体を休めるために、オレと同調した波動にのせられて、手繰られるマリオネット。

今、人目を忍んでテーブルの下で絡み合う足から、さらに情熱的な想いを一方的に伝える。うまく同調できたためか、彼女から等しい反応が返ってくると、オレの喉も一層乾いてくる。

対流している、まさに上出来だ。このまま、ネオンを遠巻きにし、けこんでしまえ。

悪魔じみてるって？ 彼女も求めていたのさ、どうせ。天使なんて優しい存在は、この街には降りてこない。むしろ、墮天使だらけ、深夜ともなれば、腹をすかせたグレムリンへと皮を剥いでいくのさ。そうして、能力だって、欲望を満たすためのもの。小さきものにあるかないかといったところで、世界の大局は揺るがない。

こんなことならば、ペテン師の方がまし。

さて、夜な夜なうろつき童子で、いつものこじんまりとしたバーにたどり着く。

ここは、オレの唯一の憩いの場。ぼんやりクリスマス仕様に装飾されてはいるが、それほど客に媚びてはいないクラシカルというか。とにかく、この時期でも落ち着く。店内は、オレよりはるかにダンディーないつもの「男爵」が1人と、背伸びした若いカップル1組アラフォー婦女が4人。婦女のカルテットがBGMの隙間に割り込んで高鳴る。それ以外は、いつもどおりの静けさか。

比較的座席が近いカップルの会話が、一人で瞑想しながらワイン傾けるオレの耳に滑り込む。聞く気は無いものの、遮蔽する要素が無いために、なかば強制的に脳裏に残り、オレの思考を揺り動かす。はーん。年下の彼氏は、お姉さまとこの先甘い関係を持ちたいと願う、まだ情の絡まない関係か。お姉さまのほうは、お嬢様そうだな、とガラスに映るその顔立ちを反射越しにうかがう。彼氏は、朴訥なのか、うまく流れをつくれなのが見て取れる上に、会話がもはやお座なりになってきている。

シチュエーションを、うまく使えばいいのに。間を取ることも大事、お姉さまはその様子から、今宵、おまえを待っているんだぞ。おい、草食男子！

でも、かつて、自身の能力のコントロールが出来なかったオレも、幾度チャンス逃したとか。相手の流れに任せてはダメ。ラックだけに頼ってもダメ。チャンスは、自分で流れを起こして掴み取る。まあ、オレの場合は、この能力で、有無を言わせないだけなんだけど。

ガラス越しに二人を眺めていて、進展の無さそうな気配に思わずおせっかいが働く。

さあ、二人は互いに目を見詰め合って、もう一度その瞳の奥を確認し合うんだ。漆黒の奥には、埋み火が見えるだろう。誰しもが宿す、情念の揺らぎ。そいつが互いの体温を次第に高め、やがていっしょになって激しく燃え上がるんだ。

ガラスに映る、二人の視線に絡むよう、オレは反射角を決めて、いつもの熱線を仕向けた。

二人の間の空気を対流させる。男爵のタバコの煙が、吸い寄せられるように二人の上空に流れ始める。ご婦人方のおしゃべりが、空気の層によって遮断された。

オレは、初めて自分が絡まない他人の關係に割り込み、能力を発揮したことになる。空間が、明らかにその作用によって変化したことに、オレだけが気付いていたのだが、それが可笑しくってガラスに顔を向けたまま、にやけてしまった。

当の二人は、直に互いの手を取り、ここの席を立て店を出るだろう。すでにその兆候は表れて、彼氏は情熱的に思いの丈を語り、お姉さまは心打たれて目が潤んでいる。

嗚呼、ロマンスナイト。この状況は、天使の分け前だぜ。

オレは、そんな天使になれるのか。他人の幸せを介助して、微笑ましく思っただけで満足できる。あと一押し、その背中を押すようにして、この能力が発動するのであれば、そんな遠隔操作もおもしろいだろう。

今宵、オレはアザゼルとなる道を、歩みだした。

<おしまい>

P i e c e 2 0 「青春のハリセン、粉碎する想い出にララバイ」

一面銀世界のまぶしさを、今となっては懐かしく感じる歳になった。

わたしはまだひとり、雪が降り積もることも珍しい都会に縛られて、この小さな部屋でいくつかの巡り合わせを謳歌している。昔から「王子様」を待ちわびていた性格。のんびりとした時間の中で憧れのシーンを想い描き、遠くから眺めていても、時折背伸びした。

ほぼ、妄想に近いシチュエーションを親友のマミとおしゃべりしながら、ただそのことが楽しくて。なんだか分かち合っていた気分もあり、運命共同体の意識があったから「友情」だなんて思ってもいられた。少しばかり当時の熱病から醒めてみれば、永遠である部分もあるだろうが、多くの部分は、マミのことも含みながら、せせこましい流れに削ぎ落とされて形状を変えてきている。

「カナコ、おぼえてる？ マサキ先輩のこと」

不意に、目の前のマミの口から、忘れていた名前が飛び出して、一気にわたしの周囲が雪景色に戻る。シアトルコーヒーの、エスプレッソの香り漂う店内から暖気とともにあったそれらが失われ、視線を落としていた目の前の、マミの薬指の指輪が徐々に薄れていき、記憶の底の方にわたしの意識は引っ張られていく。

ホワイトアウトだ。

一瞬にして、小さな駅舎の中にたたずむ女子高生、に場面は巻き戻される。

何かが詰まったカバンを大事に抱えて、気がつけば高鳴る鼓動を抑えきれずに、吐く息が白くとも、誰かをそうやって待っている、十代のわたし。

空の青さを照り返すのは、一面に雪が覆った後の銀世界。ホームの向こうには雪をかぶった田んぼが、なにも横切らない変わらない風景をたたえている、静止した世界。

人もまばらな待合室。ストーブを囲む老人。

ああ、そうだ。わたし、あのバレンタインの日、駅で東京に受験に行ったというマサキ先輩の帰りを待っていた。

初めて、告白。そして、これが最後のチャンス。

前日に旅立ったマサキ先輩の姿を、マミはしたたかに捕まえていて、お守りを渡した上に、次の日がバレンタインデーだからと、学校で待っていると周到に計画し、その意思を伝えて実行していた。

その一部始終は、わたしの目の前で繰り広げられ、啞然として事を見納めた後に「出遅れた」と気がついた始末。

だから、こうして、先回りするようにこっそり、いつになるかわからないマサキ先輩の帰りを朝から一人で待っている。

このときに、わたしとマミの間にメールがあったら、わたしたちは、何を送信し合ったかな。悠久の時間、いくつか駆け引きめいたやりとりをするのか、それとも正直に、自分が今立っている状況と心境を言葉に託して、送信していたのかな。

それほどに、あのときのわたしの頭の中では、いくつもの想定問答が繰り返されていた。もちろん、マサキ先輩にも、何と伝えたらいいのかシミュレートしながら。引き返そうか、学校に行こうか、この気持ちでいるまま、マサキ先輩に告白できるのか。

カバンの中には、確かチョコだけじゃなくって、手紙も添えてあったと思う。だから、勝負は一瞬のはず。「これ、読んでください」って渡したんだっけ。

そうして、青空に散った、返事がこなかった手紙。

それから、微妙にぎくしゃくしてしまったわたしとマミとの関係修復のために書いた、懺悔の手紙なんて、あったな。その後、マミが笑いながら「あたしもフラれたけど」って、結局、少女の憧れで終わったふたつのホワイトラブだったけど、二人して卒業式のマサキ先輩にハリセンを食らわしてやったこと、鮮やかに覚えている。

「今度、高校の同窓会あるじゃない。そこで、マサキさん来るみたいだから、もっかいハリセン食らわしてやろうよ」

「あの有名人を、また叩けるチャンスか。いいわね、今度はわたしが作るよ、マミ。今度は厚紙じゃなくて、牛革とかにグレード上げちゃう」

「死んじゃうから。しかも、ムチじゃん、それ」

あの頃の銀世界に埋もれてた手紙を、いまビリビリに破いた紙吹雪が、二月の蒼穹に舞う。乙女だった、わたしたち。

マミは先にママになって貫禄が出たけど、まだ落ち着かないわたしは、今度の同窓会にでも期待しようか。

ゲストとして来る、柏原マサキの頭上に青春のハリセンを再び叩き落とし、皆の注目と喝采を集めることができたなら、わたしは胸を張って次のステージに向かおう。

腕が鳴る。

銀世界に、あの乾いた音が、すぱーんつと響くのがイメージ出来た。

<おしまい>

P i e c e 2 1 「寄り添う星たち、輝き増すミッドナイトパーティー」

いよいよ、今宵のパーティーが始まった。

別に、忘年会でもなく、新年会でもなく、誕生会でもないのだが。僕らがこうして、はしゃぎたいがためにただ集まるなんて、何年ぶりのことだろうか。5人が、みんな各々の時間と事情に左右されて、一堂に会することは、卒業以来皆無だった。

言い出しっぺは、A B型のユウコで、気紛れにもビルの屋上でプールがある店舗を貸し切った。何のつもりだろうか。

ミナミが、「ほんとにココ、ウチらが貸し切りでいいの？」と臆病に、神経質に会費を気にしつつも、それに対し意味深に含み笑いしながら、「いいの、いいの」といなすユウコ。得体が知れない。

さらに、とんちんかんにも、この気が知れた仲では一番の出世頭でリッチなトシが「なんなら、支払いはウチがもつぜ」とか、勤め先の会社を使ってもメンツ保とうとするバカっぷりは健在。

ヨウジは、開始したその瞬間にあってもまだカノジョや浮気相手やらを招待しようと躍起だ。

「来いよ、来いよ、来いよ♪」流れる幸福の時間。

解放された、ひとときの楽園。そして饗宴。とまあ、料理はさほどゴージャスではなく、ほどほどに酒がまわる。

ただ、5人が貸し切るには贅沢過ぎる空間。青いプールの水面が、それがあるだけで何とも疑似セレブで。

互いの仕事のハードさを謳うツライ自慢や、自尊心を鼓舞するための褒め合わせ、失敗ばかりの僕は笑い話に転じてみせて、とにかくみんな話したいことが貯まっていたんだ。

目の前にある幻想的なブルーを時折眺めては、そこにここ数年の微々たる過去が、さらさらと溶け出して揺れる水面。

向こうの空にあった半分コされた果実みたいな月が、今やどっぴりと僕らの頭上近くに停留している。どんぶらこ。

僕は、とにかく日頃の鬱憤を忘れることが出来るのが嬉しくて、ユウコや皆に感謝しながらも、ひとり先走って出来上がっていた。

小高いビルの上にあるそのスペースからは、さらに高い遠くのビル群の隙間にオレンジに輝くタワーがみとめられる。一度だけ、5人で登って見下ろしたことがあった。それから階段を下ってみて、東京タワーの高さを実感した夏もあったな。

気持ちは、その夏の頃に戻り、温まってきた。

「あそこ、東京タワーが見えます。あのてっぺんに、いつかおまえらとの、この友情の徴を灯す！」

「お、スカイツリーはいいのかな？」

「あ、わたしもスカイツリーのほうがいいな」

「いいじゃん、ヤス、ながらく東京タワーのライトアップにこだわってたんだから」

「たのむよ、いっぺん、昔からのこと、かなえさせて！ スカイツリーはその次で」

もう、わけがわからん。気合とともにTシャツ脱ぎ始めちゃおう。「うおおおおお！！！」

「はじまった、ヤスの青春モード。ユウジ、付き合ってたげてー。ほら、脱ぎ始まった。今宵は、早いねー」

「やだ、ユウジ、いっしょに脱がないでよ。二人とも風邪ひくよ」

「ヤス、いくぞ、ここのプール、飛び込むぞ」

僕は酔いながらもユウジとともに上半身裸になって、プールサイドまで肩を並べながら千鳥足。

「ちょっと、危険、危険。やめて、溺れて死んじゃうから」とミニミが引く張って僕らを止める。

「おまえら、三人して落ちちゃえば」

「ミニミもー、たまにはハメはずしちゃえばー。けっこう、楽しいかもよー」

僕はユウジの鍛えられた胸板と、ミニミの柔らかな巨乳に挟まれながら、ぐてぐてとプールサイドに横たわり、三人してぐだぐだに

なりつつも笑っていた。

それから、ユウコが隠してた、この日のサプライズ。

「はい、宴もたけなわではありますがい」

いまや、パティシエとなったユウコが、贅と技術の限りを尽くして、このために仕込んだ一品。いや、まさに逸品。カーゴで自らがカラカラと手押ししながらテーブルまで運んできた、まるでウエディングケーキ！

「ユウコ、え、まさか、この中の誰かが結婚したの！？」

ミナミが酔いを醒ましたかのように飛び起きて駆け寄るも、ユウコは煙に巻いたようにして、

「近々、そんな予定のある人は、自己申告なさいな。今日は、これ、あたしからみんなに贈る気持ちよ。ウエディングケーキのつもりじゃなかったけど、なんか豪華で派手なもの作ってみたくて。あと、単純にみんなを驚かせたかったから、ね」

「自己満足なのな。昔から、自由だよなー、おまえ。しかし、今日に限って、いつになく景気良すぎだろ、いくらなんでも」

「いいの、ココの店、うちの系列だし。ケーキも、材料とかココの支配人がもってくれたから。いやー、でも今日までに仕上げるの、しんどかったあ」

「すごいねー、ユウコ。わー、でも、もう、こんなに食べられないかも」

「ヤス、おまえ、そっちから食べ。このタワー崩したら、全部いける」

「ユウコ、これ、全部食えるの？ マジで？」

白い巨塔に、ヨウジが遠慮なくメスを入れ始める。もったいない、とか言う言葉を見無視しながら、僕もヨウジに負けまいと、クリームやら時折顔を出すフルーツをがむしゃらに頬張りながら、制作者の気持ちも顧みずにフードバトル。オレの胃袋は宇宙だ、なんて名言がちらつく中、氣力を振り絞るようにして「うめえー！！」と叫ぶ野獣が二人。

このユウコの洗礼とも言える疑似タワーを食い尽くしたときこそ、まっこと東京タワーに挑めるのだろう。

五つ星で輝く僕らは、一等星として燦々と輝くユウコを軸に、等級の低い僕もいつかは目にとまる存在になりたい。大都会に散りばめられた幾多の星。抜きん出て、より高い位置で輝くこと。その象徴が、今のところ、あの東京タワーのてっぺん。

しかし、この瞬間も気が抜けない。

目の前でデッドヒート繰り広げて、そこに火花散らすのも、切磋琢磨。

さて、気絶するまで輝いてみせろよ。

<おしまい>

P i e c e 2 2 「ジャストコミュニケーション、信頼のスタイリスト」

コミュニケーションをいくつも図らなくては、社会で円滑に生きてはいけない。

巧みな、タイトロップ。道化でいられる瞬間が、実は肩の力が抜けて、絶妙だったりする。

「で、奥さまは何て言ってるんですか？」

「そっちの方が、むいているんじゃないかって。確かに、その通りなんですよ。だってね、人を騙すってわけじゃないけど、ギリギリの交渉術が必要な場面って、結構あるわけじゃないですか。そのあたりがうまく立ち回れないから、すごく苦勞するし、何より心がついていけない。押して押して、グイグイ行く世界は、やっぱりダメらしいし。ほら、根っからの草食系なわけですよ」

「そうですね。フジイさん、ガツガツしてる姿、わたしには想像できないですし。笑っちゃいますね、こう、熱くなって、身を乗り出して檻から飛び出しそうなの？ 噛みつきそうなの？ フジイさんって」

「でしょう？ だいたい、イメージが誰と向き合ってもそうなんですよ。第一印象からそれだから、戦闘意欲もないというか。仕方ないから、こっちはすぐ微笑み返しですよ。おかげで愛想笑いが板について。スマイリーとか言われた時期もあった」

「いんじゃないですかあ。フジイさんとお話する度に思いますけど、和むわあって。ぜんぜんトゲ出さないじゃないですか。だから、奥さまも、そのあたりをきちんとわかってらして」

「だと、いんですけど。何かほかにも含みがありそう」

「ほら、また。たまには斜から物事を考えないようにしなくちゃ」「えー、つまり、また、尻に敷かれていろと？」

うふふ、という柔らかい笑いを浮かべて、次なる七つ道具の一つにチェンジするべく、それを取りに向かうオオシタさん。鏡には、毛を刈られかけているヒツジが一匹。自由を奪われた格好でイスに

収まり、彼女が戻ってくるのを鏡越しに目で追う。

もう、この美容室に2年もオオシタさん指名一本で、このちんちくりんのクセ毛を面倒みてもらっている。彼女の腕もさることながら、このリラックスできる時間を買っている、というカンジ。お互い年齢が近いせいもあり、僕としては気が許せる数少ない女性。美人だ。

オオシタさんは戻ってくるなり、豪快に僕のショートに向かいつつある髪の毛全体を、隈無く梳いていく。この作業が、けっこう心地よい。みるみるヒツジの毛刈が完成していく。鮮やか。爽快。

「いつから、新しい会社に行くんですか？」

「6月から、ですかねえ。まだ、社長に話してはいないんだけど。

蹴り殺されるかな。あ、でも、そんなに今は必要とされていないか」

「やめてくださいよー。そんなことないですって。フジイさん、よく後輩さんたちの面倒みてらしたって、仰ってたじゃないですか。みなさん、きつと悔やむと思うんですよね。そういう、なんていうんだろ、緩衝材的なひとつって、組織に必要じゃないですか。居なくなって、初めて知ることなんでしょうけど」

「達観。オオシタさん、さすがキャリアあるから、違うね。でも、緩衝材、かあ……。あの、プチプチみたいなやつのことでしょう？」

「違いますって」

また、今度は幾分声を弾ませて笑う彼女。ハサミが止まる。ウケた、かな。

OL、ネイリストとしてもキャリアを積んできた猛者の慰めの言葉には、確かな安心感が宿る。

「オオシタさん、今度、飲みに行きましょうよ。うまく転職した暁には、お祝いをしてくださいませんか」

「奥さまに了解とってくださいね」

安っぽくはない、笑顔。と、同時に着実に仕上げていく真剣な雰囲気。これは、どっちだ。

いつになく、客がいない空間だけに、不思議な土曜の午前。まだ、

傾斜がついた真冬の眩しい太陽に、ブラインドが透けそうだ。

ボサノバが、悪くない気分の、静かな二人の間合いを計る。

「はい、ご確認ください。長さ、だいじょうぶですか？ この時期に、思い切りましたよね」

「そう、未練は、こうやって断ち切るのです！」

あははっと、豪快な笑い声。これも、ウケた。

気取ってつくっていた、イケメン風（なのか不明）ロングを、ベリーショトに削り込み、少年の頃に戻る。

いいじゃない、想像以上に若返った。

くるりんぱっと、手品のようにはがされと、ふわふわに刈り取られた大量の毛が舞った。軽くなった。これでいい具合に脱力できれば、次のステージではもっと別の自分が演じられるだろう。

彼女は僕をそう仕立ててくれる、スタイリストだと信じている。

ほとんど、鏡越しの小一時間内の会話を積み重ねて、こんなコミュニケーションが育んでくれた、変化へのきっかけと後押し。

そんなささやかなことを、微風を帆に受けながら、泰平の世の中、いや大海原を僕は航海していく。

はいはい。オトコって、そんなもんですよ。

<おしまい>

P i e c e 2 3 「スターティングオーバー、後ろ向きから、前へ倣え」

ひさびさにタクロウにあったら、昭和の機関車みたいだったやつが、すっぱりタバコを止めていた。

かわりに目の前がモクモクしているのは、タクロウが好きなホルモンを、炭火でじゃんじゃん目の前で焼いているから。ロースターも無い、昭和の香りの染み着いた座敷で、二人で差し向かっている。なんでも、二世帯同居の義父さんが肺ガンでタバコ止めたのにつきあつて、いっしょに止めたんだとか。タクロウは、そうやって誰かのために、自分を変えていけるやつなんだ。すごいことだ。

「キョウジ、おまえまた浮気したの？ そりゃあ、フユミちゃん怒るって。何回目だよ。二、三：六回目か！ 女の子が多い会社だからって、調子のりすぎてるんじゃないの？」

「今度ばかりは、マジで怒ってて、金沢に帰っちゃったの」

「今度って、おまえ、毎回怒らせてるんだろ。四回目の、あのコ、なんだっけ、ネネ？ そこまでは覚えてるけど、今はあの時と違ってムスコいるだろ？ 少しは親としての振る舞いをしろよ」

「ねー、タクロウはさー、リツコさん以外には興味ないわけ？ 子育て中にさー、ほったらかされて、つまらないなーとか」

「おまえはな、育児参加しなさすぎなんだよ。嫁さんといっしょに子供の世話してたら、それ以外気になることなんかない。子どもといっしょの時間って楽しいだろ。おまえのムスコ、パパと遊びたいっていわないのか？」

「あいつ、ママが好きだからなー。女好きなのかもなー」

「バカ。ちゃんと考えろよ、フユちゃんだってなー、どんなに子ども世話ばかりだっていったって、おまえの世話もちゃんとしてくれてただろ」

「言われてみれば。こうして母親の居ない生活がどんなに苦勞することか。自分一人ならまだしも、ムスコの世話まで考えたら、ほん

と手に負えない。そうか、我が家はコドモが二人になったただけだったのか！ おれ、なんて、バカだったんだ。ほんと、コドモのままだ」

「それがわかって反省したら、あとはどうするんだ？」

じゅうじゅうと脂がアミの上で香ばしくなって、思考の沈黙の間に焦げていく。

「よし、明日、金沢に行って、謝ってくる。連れ戻すぞ」

タクロウはニヤつとして、シロコロを僕の方に何個か転がし、自分もつまんで、満足そうだ。

いやだな、ほんとにこいつのしたり顔は何度見せられるのだろう。人生をうまく歩む理想的な姿を当てつける。これで、お互いがお互い嫌気がささないのが妙な友人関係。

翌朝、僕は姉貴のところに寝ぼけたままのキョウヘイを預けて、金沢に飛んだ。

義父さんにはなんて顔向けしようかと、考えている暇もなく、出たとこ勝負。

フユミ、ごめんなさい。フユミさま、僕が間違っていました。何度心の中で問答しても、たいして起死回生できうる言葉は浮かばない。

しかし、このまま突撃する！

戦場を、がむしゃらに突き抜けた感がある。今は、紅く染まった夕暮れが、静かに暗闇に溶け込む境を目指しながらとぼとぼ歩いている。

くたくたになったものの、帰りに姉貴の家によって、昼寝してるままのキョウヘイをおんぶして帰宅する。

「とおちゃん、空にいっぱいあるな」

いきなり目を覚ましたかと思ったら、耳をひっぱりながら頭上を見ろとコントロールしているつもりらしい。キョウヘイに言われるまま見上げると、遠くまで連なったひつじ雲が空を行進していた。

「おまえ、好きだったもんな、ママのへんてこな歌」

「もーくもくずんずん、くーもくーもぶんぶん」

「いっしょに、歌いたくなったか？」

「うん。今まで、がまんしてたんだ、えれーだろ、えれーだろー」

「二回も言わない。……よし、ママと仲直りしてきたから、いっしょに歌うか、バカみたいだけど」

「とおちゃん、もともとバカじゃなかー」

「親に向かって、バカと言わない。ほら、おまえ、起きたなら歩けよー」

「ママ、いつ帰ってくるんだ？」

「うー、そうだなー、こうして、キョンと二人で楽しそうに遊んでたら、仲間に入りたくなって、そのうち帰ってくるかもな」

「早くー、帰ってこないかなー。カレーばかり、カレー王子になるー」

「いいだろ、おまえカレー好きなんだから」

僕らは暇つぶしもいいことに、誰がつくった歌なのかもわからな
い（おそらく妻のデタラメ）歌をちぐはぐに口ずさみ、ひつじ雲を
数えながら帰った。

全部数え終わる頃には、きっとあいつも僕を許してくれるだろう。
そう願いながら、土手の上の親子鷹、新たなスタートをきって走り
出した。

雲は限りなく続いて見えていたけれど、その先をゴールと定めて、
歩調を合わせる。

きっと、たどり着ける。

だから、もう一度、僕らを迎えてくれよ。

<おしまい>

P i e c e 2 4 「ブルースカイ、残雪が溶けて、やがて花咲く頃」

公園を、いつもより気持ちよく抜けた。

時折、吐息が白い朝もあるけど、着実に温かくなってきた。

桜の花は、未だ咲かない。いつから、桜の花が咲くことで、春を感じるようになったのかな。

山に囲まれたこの町では、ほかの植生が強すぎるんだ。

まだ、残雪をかき集めた塊が校舎の影にどしりと固まっている、北国の春。女子校、最後の卒業生をあの日、送り出した。記念すべき時にあって、空は清々しく澄み渡ってブルー。

ラスト・ナデシコ、ミハルさん、卒業おめでとう。

一年先に、この町を出て行くミハルさんは、あのときの僕にはとても眩しすぎた。女々しくも、ただそうやって遠く高嶺の花を眺めて過ごした二年間。たった数ヶ月しか違わない、生まれおちるタイミングの差が、この多感な時期にあって、おそろしく次元の隔たりを感じさせる「学年」という敷居。今思うと、そんなの越えられない「距離」じゃなかった。

僕は、パークのフードにまわりつく汗を拭いながら、ふと、思い出し笑い。

あの夏の駅舎での、思い出。

ホームに、ラケットを入れたバッグだけ持って、一人立ち尽くす高校生だった。

「また、会ったね」

真夏のキセキ。風鈴が、幻想的にスローに共鳴する瞬間。心にも涼風が吹き抜ける。

ミハルさんが、僕の隣にたたずんで、あのおそろしく間隔の空いた列車の待ち時間のなか、さらに所在ない状態へと陥れた。動転。心の準備が、整っていない。

「キミ、朝もここに立ってたよね。……ずっとここに居るわけじゃ

ないよね？」

確かに、その朝も、僕は同じシチュエーションでミハルさんと出会った。デジャヴみたいに、またこうして偶然おちあつて。そんな奇妙さに、お互い軽く笑った。ん？　まるで、ストーカー？

「いちおう、部活やってきて、帰るとこなんですけど。そう、思われても、仕方ないっすよね」

「男子、県大出るんだって？　まだ二年目なのに、やったじゃん」

「キセキですよ。おれら男子部も組長にシゴかれただけは、あるんですかね」

「あのひと、キツイよね。あ、この前、キミら、コート入る前に怒鳴られてたでしょ」

あははと笑う、その笑顔に見とれてしまう。そんな心の余裕も無いままに必死に会話をつなぐ。つもりが、ぽつりぽつりの途切れ途切れ。止まない心の動悸を偽りきれず、これが恋だとうやうやく気がつく17の夏。ミハルさんは、大人びてた。

「東京、ですか」

「うん。教師になりたい、とか思ったけど、今はそれも目標のひとつで、いろいろ可能性探してみるの。夢見がちだから。わたし、大学いけるほど、アタマ、あんまり良くないんだけどね」

「またまた、何を言ってるんですか」

先にミハルさんの方面の電車がきたので、その姿を見送って、なんだかそれが最後のシーンみたいに印象に残っている。正直、交わした会話の内容は定かではない。蜃気楼だったかもしれない。

それから幾度か集団の中で視線を交わして、言葉は交わさず、人づてにいろんな噂を聞きながらも真偽は確かめられず、いつの間にやらハレの日のミハルさんを遠く見つめていたつけ。

ドラマなんて無い。月日の経つのは、そんな残酷なスピード。

校門で卒業生を見送る一団に紛れて、柄にもなく花束を仕込み、ミハルさんに渡すべく待ち伏せ。が、しかし女子部のキャプテンだったゴリに渡してしまうハプニング。不本意なことにもかかわらず、

思わずミハルさんの笑顔が拝めた。

圧倒的な女子の群れに押し流されるように、ミハルさんがフェードアウトしていった。

なんとなく持て余した時間、男子は小学生みたいに残雪に飛び込んで、ふざけて祝宴のつもりでバックドロップをお見舞いし合って祝ってみた。

溶け損ねた名残雪を碎き散らしてはしゃぎながら、あの頃は桜が咲いてはすぐに散るひとときの儂さを大事に思うことなんてなかった。微塵も。

思い出の中に浸っていても、照れくさい情景。振り切るようにして再び、風を切って走り出す。

振り払えないまま、ついてまわる清いままにしておきたい美しき情景。どれだけ走っても、置いていくことはできなかった。

今、蕾が膨らみ始めた花の匂いに心躍らされている。そう、花が咲く時期を告げる温かさ、春が運ぶ風と大陸の匂いと、そうやって入れ替わる何もかもへの期待と不安が混在した、大人の時間のあわいに。

これまで幾度となく繰り返してきた通過儀礼、同じ場面。なのに、気がつかなかった。桜は、春になると、心待ちにしている人々の願いを叶えるために、必ず目につくところで咲いていて、瞬く間に惜しまれつつも散っていく。一斉に。

そんな、イベント。気にも留めなかった、きつと。

夢中になるものが多すぎて、それしか見えていなくて、それ以外には関心がなかった。駆け抜けた青春を惜しむ気持ち。狭い見だな。見落としていたものが、たくさんあったのかも。

それは、ひとつひとつ空に舞う、散華みたいに、やがては雲となって漂い消えるのに。儚いもの。でも、失われたわけではなくって。だって、こうして季節は巡って来て、期待通りのシーンを演出してくれるんだもの。

花霞みの遠い空には、残雪が淡いホワイトを遺したアスピーテラ

イン。

飛び石みたい雲を渡り歩いて、青い青い空の端までステップ。おそろおそろ稜線を越えてはるか都会を望んでも、決してミハルさんの姿は見つからない。ただ、あきらかに北上してくる花の香りに期待ばかりして、これまで何度も騙されてきた。

こうしてひとつのことを続けながら、ひたむきになりながら、時折思い出す感情の塊は、あの時の残雪の如くにいずれ溶けて跡形も無くなるだろうか。ただ確かなのは、年をとるごとに心の残雪の塊が徐々に溶けて、かわりに開花を間近に感じられるほど嗅覚が研ぎ澄まされてきているってこと。

そんなこと、おかまいなしに、花は明日には気まぐれに咲き出すかも。

「また、逢ったね」って。

<おしまい>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6744w/>

流れる 羊雲

2011年9月16日03時31分発行